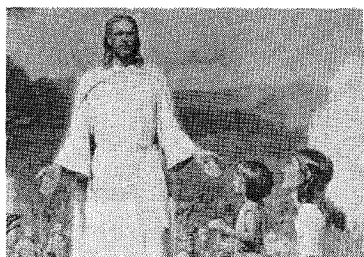


聖徒の道 9 1984





本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル
ラッセル・M・ネルソン
ダリン・H・ホークス

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミツチエル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

レイアウト・デザイン：

マイケル・カワサキ

もくじ

この世が改宗するとき……………	スペンサー・W・キンボール…	1
質疑応答●純潔の律法……………	バール・F・スコット……………	7
主の降誕以前の主のみ名……………	スティーン・D・リックス…	10
私こそ教えられる者……………	ジョニソン・バード……………	12
父との再会……………	アブラハム・キンボール……………	13
私たちはクリスチャンです……………	ロバート・E・ウエルズ ……	18
人との比較……………	アニー・ヘイトマン……………	24
魂の闘い……………	メルビン・J・バラード……………	30
両方のいいところ……………	ペティール・ルー・メル……………	42
ノアとはこぶね……………	「聖典からの物語」より……………	46
お子さまクッキング……………		50
おもちゃばこ……………		52
チャーチニュース／ローカルページ……………		54

表紙写真：昨年献堂された神殿。表表紙はアピアにあるサモア神殿，裏表紙はヌカラロファにあるトンガ神殿。

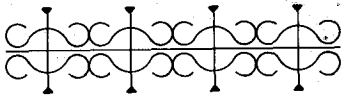
1984年9月号 聖徒の道 第28巻第9号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 明文社
定 価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
1部180円，大会号350円

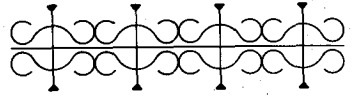
International Magazine PBMA0493JA Printed in Tokyo, Japan.

©1984 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替（口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号／東京0-41512）にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8／末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理 理部渋谷ブックセンター／☎03-464-1617(代)



大管長会 メッセージ



この世が 改宗するとき



大管長

スペンサー・W・キンポール

1974年の年次総大会は、キンポール長老が大管長となつて初めての大会であるが、その4月4日の地区代表セミナーにおける話を、大管長の指示により、家庭でも利用できる形に編集、短縮して掲載する。

今最も心にあることをひとつお話したいと思います。

主は啓示の中で、予言者ジョセフ・スミスにこう言われました。

「而して汝らもし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15)

もしひとりも改宗者がなかったならば、この教会は萎えてつるのまま枯れてしまうでしょう。しかし伝道を行なう最大の理由は、世の人々に福音を受け入れる機会を提供することだと思います。聖典には、福音を教えよとの戒めやそれに伴う約束、その召しや報いについてたくさん書かれていま

す。私はことさらに戒めという言葉を使いますが、それは、このことが私たち個人としても全体としても逃れることのできない重要な指示と思われるからです。

考えてみていただきたいと思います。主が十二使徒をオリブ山の頂上に伴つてこう言われたとき、何を言おうとされたのでしょうか。

「……あなたがたは……エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」(使徒1:8)

これは、主が天の家に昇つて行かれる前の地上最後の言葉でした。

「地のはて」という言葉はどういう意味でしょうか。主はそのときまでに、使徒た

ちが知っていた土地をすべてまわっておられたのです。ユダヤの民でしょうか。サマリヤの人々でしょうか。あるいは近東に住む幾多の人々でしょうか。地のはてはどこにあったのでしょうか。今はアメリカとなった所の人々を指して言われたのでしょうか。ギリシャ、イタリア、地中海諸国に住む何千何万の民、あるいは中部ヨーロッパの民を考えておられたのでしょうか。主は何と言われたのでしょうか。全地のあらゆる生ける人々、この先、世に生まれ来るすべての霊たちのことを言われたのでしょうか。私たちは主のその言葉の意味を軽視してはいなかったでしょうか。

主が十字架につけられた後、11人の使徒がガリラヤの山上に集まっていると、救い主が現われてこう言われました。

「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。

それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、「すべての国民」と言っておられます。あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(マタイ28：18-20)

ここでも「権威」という言葉、「命じる」という言葉、そして常に助けがあるという約束が言われています。

1830年、パーレー・P・ブラット、オリヴァ・カウドリ、ピーター・ホイットマー、ザイバ・ピーターソンをレーマン人の間に遣わされたとき、主は次のようにつけ加えられました。

「われ自らも共に行き彼らの真中に在らん。われは父に彼らを擁護すれば、何も

のも彼らに打ち勝つものなからん。」(教義と聖約32：3)

モーセが見た世界を想像してください。大きな世界でした。

「モーセこの世と、この世の^{はて}と、創らるるすべての人の子らと^{かつ}嘗て創られしすべての人の子らとを見て……」(モーセ1：8)

主はそのとき、人の住む境界や居住する地域を知り、すでにこの世界を所有することになるその民のことを知っておられたと、私は思います。

み業と栄光の偉大さをモーセの心に刻みつけて、主はさらに示現を示されました。

「モーセその目を放ちてこの世を見たり。すなわちこの世にあるすべてのものを見たり。彼の見ざりしもの^{ちり}塵一つなかりき。彼はそれを神の『みたま』にて見極めたるなり。

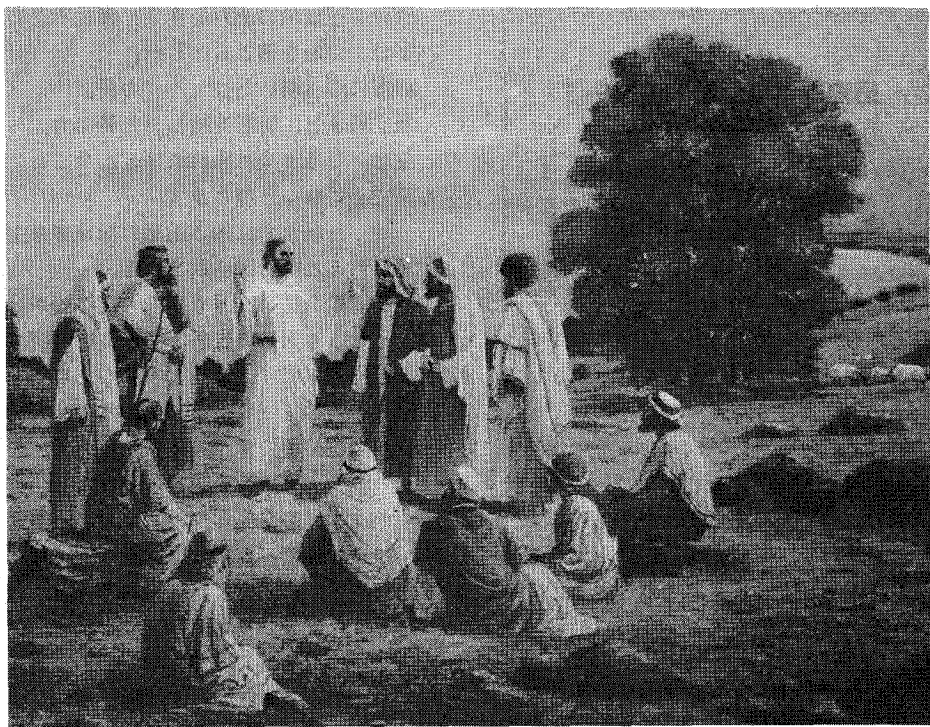
……その数はいと多くして^げ実に^{いさご}浜の砂の数え切れぬ如く多かりき。

モーセまた多くの土地を見たり。その一つ一つは陸と呼ばれ、その陸の^{おもて}面にはそこに住む人々ありき。」(モーセ1：27-29)

予言者エノクも神の造られた霊たちを見たことはご存じの通りです。(モーセ6：36参照) これらの予言者はおびただしい数の霊たちとすべての造られたものを見ました。「すべての国」「すべての地」「地のはて」「あらゆる言語」「あらゆる民」「すべての人の子ら」「全地」「多くの土地」と主が言われるとき、主はその言葉を注意して選ばれたように思います。

これらの言葉には、確かに意味が込められています。

主の羊は、主の周りにいて毎日交わることのできた限られた人々だけではありません。全人類という家族です。全人類への命



令です。

兄弟姉妹の皆さん、私たちは自分にできるすべてのことをしようとしていますでしょうか。福音を人々に教えるという務めを喜んでいるでしょうか。歩みを速める用意はできたでしょうか。私たちの視野を広げる用意は？

忘れないでください。味方は神です。神が私たちの指揮官です。神が計画を立て、命令を下されました。何回となく引用されるニーファイの言葉をいつも覚えていてください。

「そこで私ニーファイは、私の父に『私は主が命じたもうたことを行って行く。私は、主が命じたもうたことには、人がそれを為しとげるために前^もに以てある方法が備えて

あり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである』と言った。」(Iニーファイ3：7)

この聖句を読むと、私はいまだ知らない数多くの国や人々のことを思います。

どういふわけか、自分たちの力の限りを尽くせば、主は扉を開く道を見つけてくださると感じるのです。私はそれを信じています。

「主にとって不可能なことがありますでしょうか。」サラに男の子が生まれると聞いて彼女が笑ったとき、主はこう問われました。サラが天幕の入口でそれを聞いたとき、100歳のアブラハムも90歳のサラも子を持つ年齢を過ぎているのを知っていたからです。サラは子を産むことが不可能でした。彼女

伝道を行なう最大の理由は、
世の人々に
福音を受け入れる機会を
提供することだと思います。

はそれを知っていました。私たちが、多くの国の扉を開くことはできないと承知しているのと同じように。

「主はアブラハムに言われた、『なぜサラは……笑ったのか。』

主にとって不可能なことがありますか。来年の春、定めの際に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生まれているでしょう。』（創世18：13-14）

兄弟たち、サラは男の子を生みました。国民の父であるアブラハムとの間に。

「このようにして、ひとりの死んだと同様な人から、（これは100歳の老人であるアブラハムのことです）天の星のように、海べの数がたい砂のように、おびたしい人が生れてきたのである。』（ヘブル11：12）

主にとって不可能なことがありますか。

主はエレミヤにも言っておられます。

「見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。わたしにできない事があるろうか。』（エレミヤ32：27）

主が命じられるならば、確かにそれはできます。

エジプト脱出のとき、とても渡ることでできない紅海をイスラエルの民が渡ったことを思い出します。

クロス王は川の流れを変え、難攻不落のバビロンの町を落としました。

約束の地へ着いたリーハイの民。

独立戦争と、勝利を得しめた神の力。

主は、こうと決められればどんなことでもおできになると信じます。

しかし、私たちに入る用意のない扉を主が開かれるとは考えられません。

現在、教会には2万6千人の宣教師がいます。もっと大勢の宣教師を送ることができと思うのです。ずっと多くを。もっと大勢の若人と、さらに多くの円熟した夫婦の宣教師が必要です。

より多くの宣教師を求めるとともに、世界中のすべての支部とワード部で、もっと早くから始めて、宣教師を訓練していただきたいと思います。また、これはもうひとつのチャレンジですが、伝道に出ることが大きな特権であって、体も心も霊も健康でなければならぬこと、「主はいささかも罪を見逃したまわない」（アルマ45：16）ことを若人たちは知ってください。

家族と教会の組織を通じて周到な訓練を受け、そして大きな望みを抱いて伝道にいで立つ宣教師を求めます。ずっと早くから、もっと長い期間、よりよい訓練をして、将来の宣教師が自分の伝道を大きな喜びをもって待ち望むようになってほしいと願います。

ふさわしい若人は皆伝道に出るべきですか、という質問がよくあります。主はそれに答えておられます。「はい」という返事です。ふさわしい若人は皆伝道に出るべきです。

また、だれもが什分の一を納めるべきです。皆安息日を守るべきです。皆出席すべき集会には出席すべきです。皆神殿で結婚

し、子供たちを正しくしつけ、ほかに様々な立派な働きをなすべきです。それは当然すべきことです。

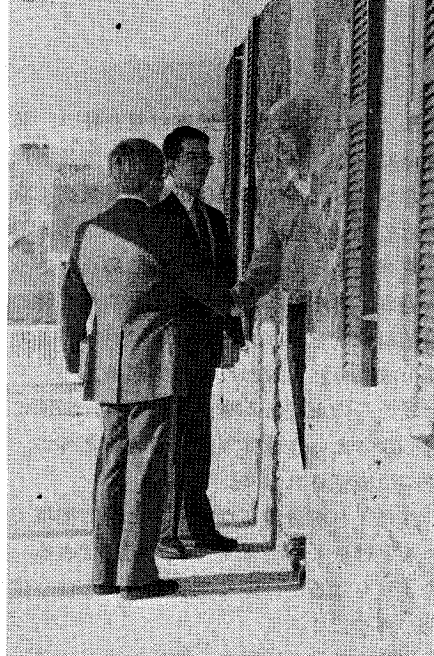
ふさわしい男性は明らかに皆伝道に出るべきですが、全員に外国で福音を教える用意があるわけではありません。こう申しませう。すべての資格ある立派な男性は、この十字架をになうべきです。キリストと、十字架につけられたその主について教える軍勢は、一体どのようでしょうか。そうです。普通には自分で貯めた資金と、例外なく奉仕に輝く心を持つ備えのできた人々です。

主は言っておられます。

「また、人ごとごとく（ことごとくと言われているのに気づきましたか）その手に正義を取り腰に忠信を纏いて、世に住める人々に警め（よこしま）の声を挙げ、言葉と逃げ走ることと両つながらによりて悪人の上に荒廃のおそい来るを宣べんことを欲す。」（教義と聖約63：37）

再び繰り返したいと思います。私たちの主たる目標は天父の目標と同じです。あらゆる人に、その人の永遠の生命への扉を開く福音を伝えることです。私たちの目的は権力や支配を求めるのではなく、まったく霊的なものです。またこの福音に対してその境を開く国家や国民には、信じがたい祝福がもたらされるでしょう。

私たちが自分にできるすべてのことを行ない、また私がこの責任に自分の分を負うたならば、主は必ずやほかの新しいことを、私たちの手に握らせてくださいます。主は王や元首や皇帝の心を変え、あるいは川の流れを変え、海を分け、道を見つけて人の心を動かされるでしょう。門を開けて、改宗を可能にされるでしょう。そのことに



いて、私は大きな信仰を持っています。

さて、私たちは主から、主にせよと命じられた業を悪魔は決してくつがえすことができないという約束を受けています。

「この王国は拡大し、成長し、いよいよ広がり、繁栄し続けるであろう。その敵が打倒を企てるたびごとに、さらに広大、強力となり、減少ならぬ増大を続け、ますます伸び、いっそうすばらしく、諸国の耳目を集め、やがて全地を満たすのである。」（ブリガム・ヤング、1852年4月総大会）

1842年3月1日に書かれた、ウェントワース書簡の中の予言者ジョセフ・スミスの声明はご存じのことと思います。（「教会歴史」4：536を参照）予言者ジョセフは前途を望み、国内の敵意に根ざす多くの問題や猜疑、暴動、戦争の不安を見たに違いありません。彼はそれらすべての起こることを知りつつ、それでも確信を持って大胆に述べました。

「いかなる汚れた手もこの業の進展を止

めることはできない。迫害は荒れ狂い、暴徒は結束し、軍兵は群れ集まり、誹謗は飛びかうとも、神の真理は雄々しく気高く毅然としてい進み、かくしてあらゆる大陸を貫き、あらゆる土地を訪れ、あらゆる国を過ぎ、あらゆる耳に聞こえ、やがて神の目的は成就を見、大いなるエホバは『この業、成れり』と言われるのである。」

私たちの前にある業の広大さは、50億に達しようという世界人口を考えると、改めて実感されます。

私はそれが造作もなく、ひと晩で実現できるとは全く考えませんが、前進できる、今よりもはるかに速く発展できるという信仰があります。

以前に日本と韓国を訪問したとき、私は大勢の立派な若人が教会に加わり、組織の指導者となっているのを見て、外国に喜んで赴こうという用意のできた強い人々が地域に大勢生まれる大きな動きを見た思いがしました。それからメキシコに滞在して、またも、大勢のメキシコ人青年や中南米出身のラテン系青年が自国で伝道の業に仕える資格を備え、やがてこの主の宣教師の軍勢が、水が底知れぬ深みをおおうように地をおおうであろうことを心に描いたのでした。

私はチャレンジと言いました。方法はあると信じます。もし私たちがひとつの精神、ひとつの心、ひとつの目的に一致したならば、大きな勢いをもって前進できると思うのです。

私たちは、デビッド・O・マッケイ大管長が示された理想に近づくことができます。「すべての教会員は宣教師である。」これは靈感による言葉です。

この話は目新しくはないこと、以前から言われてきた事柄であることを承知してい

ますが、私たちが武器をになうべき時は来たと思います。再び視野を変え、目標を掲げなければならないと思うのです。

大いなる責任に向かうとき、私たちの上に主の祝福が注がれますように。

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 伝道を行なう最大の理由は、天父の子供たちに福音を受け入れる機会を提供することにある。
2. 主は、誠実に主の教えを人々に伝える人たちを絶えず支えてくださると約束された。私たちは恐れる必要がない。
3. まだ福音の教えに触れていない国がたくさんある。主に福音を教える扉を開けていただくために、私たちには多くのことができる。
4. 良い伝道の準備ができるように子供たちをどのように導くべきか、両親は祈りをもって考えることが必要である。
5. 前途に横たわる伝道の業は途方もなく大きいように見えても、信仰を持って進めば奇跡は起きる。

話し合いを進めるために

1. 伝道活動について自分の気持ちや経験を話す。家族にも話してもらおう。
2. 家族で朗読したり話し合ったりすると良いと思われる聖句や引用文がこの記事の中にないだろうか。
3. 訪問の前に家長と打ち合わせた方が、良い話し合いができるのではないだろうか。伝道の責任について、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

父との再会

アブラハム・キンボール

記者注：アブラハム・キンボール（この神権時代最初の使徒のひとりであるヒーバー・C・キンボールの息子）は父と離れ、教会に反対する親戚のもとで育てられました。彼は1862年に、父親がブリガム・ヤング大管長の副管長として仕えているソルトレーク・シティーへ旅し、そこで家族とその信仰を受け入れ愛することとなりました。以下の話は、教会記録保管庫に保存されているアブラハム・キンボール自身の手記によります。



私 たちがフォートホールロード（アイダホ州）に着いたとき、いくつかの幌馬車隊がインディアンに襲撃されたという知らせが、一緒にカリフォルニアへ向かっていたジェームズ・スパイサーという男に届いた。彼は計画を変更してユタを通ることに決めた。

「おれは勇敢に死んでやるぞ。」自然と自分はモルモン教徒に殺されるか、もっと悪い目に遭うと思った私は、彼にそう言った。このときまで、仲間たちは私の親のことをだれも知らなかった。スパイサーには話し

た方がいいと、そのとき思った。

「おれの父親がユタにいるんだ。」

「だれだい。」

「よくわからん。」私はそう答えた。事実その通りだった。だれかわからないが、面倒が起きることはわかっていた。

「やつらはおれを捕らえようとするだろうな。」

「だが、フォートホールロードは危険だよ。まず無理だ。ユタを通ることにする。」

スパイサーは笑って言った。「大丈夫だよ。」彼は自分の幌馬車に乗り込み、ユタへの道に向け、北へ牛たちのくつわを回して出発した。

悪夢だった。ひとりで引き返すには遠すぎた。一生で一番恐れていたことが現実になろうとしていた。私はモルモン教徒に対する極度の偏見と激しい憎悪の中で育てられ、私にとってモルモンという名は、醜く恐ろしい怪物と同義語だった。彼らにつかまる夢を何回も見、昼は昼で、獣のように檻に入れられた捕らわれの身を想像するのだった。

私はそれまでモルモン教徒を見たことがなく、父のことも覚えていなかった。彼ら

について知っていたことは、祖父や祖父の家族から教えられたことだけだった。父は私がほんの1歳のときに、ふたりの妻（私の母のクラリサとその姉妹のエミリー）と兄のアイザックと私を祖父のアルフィアス・カトラーのもとに残して、ユタへ向かったのだ。その一陣に加わった女性はわずか3人だった。ほとんどの妻が、信頼を置く親戚や友人の所に身を寄せ、その後数年の間に遅れてユタへ到着している。

2年後に私の母は死に、数カ月して叔母も亡くなった。祖父はアイオワ州マンタイに引っ越し、そこに自分の教会を建てた。彼は自ら指導者を名のり、教会を「真正末日聖徒教会」と呼んだ。

祖父は一夫多妻と什分の一を廃止し、ジョセフ・スミスは神の真の予言者だったがブリガム・ヤングは後継者ではないと信者たちに教えた。また、自分は末日の業を遂行する権威を持った真実の指導者であると主張した。

兄のアイザックと私は祖父の家族から冷たい仕打ちを受け、一夫多妻の家の出とののしられていじめられた。少しでも気に入らないことがあると、モルモン教徒にすぐつかまるぞ、ユタへ送るぞとおどされた。森に遅くまでいるとモルモン教徒にさらわれると教えられた。ベリーを摘んでいるときに、藪やぶの中でさがさが音がして驚いたことが一度ならずあって、私たちはかごを投げ、おびえたカモシカのように、後ろも振り返らず一目散に家まで逃げ帰るのだった。

1862年の春に、私はアイオワ州ハンバーグに行かされ、1週間叔父のエドウィン・

カトラーの所に滞在した。そのときに叔父から一緒にカリフォルニアへ行く気はないかと聞かれ、行きたいと返事した。

旅をして、プラット川のほとりのコロラド州ジュルスバーグの町を過ぎた。ある朝、いつもより少し寝すごして、日が昇ってしまったことがあった。叔父は私を揺り起こし、世話をするためにお前を連れて来たのではない、おれの世話をさせるのに連れて来たのだと言った。叔父は私を下男に使えろと言って喜んでた。

その数日後、叔父が私をどこへ連れて行くつもりか知っているかと、叔母から尋ねられた。

「カリフォルニアさ。ほかのどこだって言うの。」私は答えた。

「ユタのお父さんの所へ連れて行くんだよ。」叔母が言った。

私はできるだけ早く叔父のそばから逃げ出そうと決心した。ワイオミング州のラミーに着いたとき、後から隊に加わっていたジェイムズ・スパイサーが、自分の幌馬車から私を手招きして呼んだ。

「ユタには行きたくないんだろ。」

私はそうだと答えた。彼はユタの外をまわるフォートホールロードに行くつもりでいた。叔父が毎日私をこき使っているのを見て、私がおもひ行きたいなら一緒に連れて行ってもよいという話だった。

2日して、叔父が私の所へ来て言った。

「エイブ(アブラハムの略称)、牛たちをまとめろ。きょうの昼過ぎに発つ隊があるんで、一緒に行くからな。」私は、この先はもうついて行く気はない、スパイサーと一緒にカリフォルニアへ行くと、叔父に話した。

叔父は、スパイサーと行くのを何としても思いとどめさせることはできないと知ると、モルモン教徒に会うごとに、ヒーバー・C・キンボールの極道息子が後から来ると言いふらしてやるぞと言った。ヒーバー・C・キンボールはモルモン教徒の指導者と聞いていたので、ユタへ行くのはなおさら怖かったのだ。

さて、私はユタに向かっていて。後戻りは不可能だった。運命の日も近い。

ワイオミング州のグリーンリバー・フェリーでもっと大きな問題が起きた。ルイス・ロビンソンというモルモン教徒に出会ったのだが、私の話を聞いた彼が、ソルトトレーク・シティーに到着したら父に面会するつもりかと私に聞いたのだ。

「できれば会わないつもりです。」

「あなたのお父さんは立派なお人だ。会われたら大喜びされる。私は朝に馬でソルトトレーク・シティーへ発つので、着いたらあなたが来ることをお父さんに知らせよう。」

ユタ州パーレーズ・パークへ着くまでは、それ以上モルモン教徒に会わなかった。だがそこで、パーレーズ・パークにウィリアム・H・キンボールが住んでいることを知り、彼は私の異母兄弟だと聞かされた。

私は絶対の窮地へ近づきつつあった。こうなっては平静を装って肝をすえて、最悪の事態に備えようと決心した。困難には真っ向からぶつかる方がよびと思ったので、その異母兄弟の家を訪ねることにした。私は回転式連発銃を腰につけ、ひとかみ分のかみタバコを持ち、これが今生の別れと信じ、皆にさよならを告げた。



ヒーバー・C・キンボール

ウィリアムは、叔父から人相などを聞いていて、すぐに見分けがついた。

「やあ、エイブ。どこから来たのかね。」彼は私と会えたのがよほどうれい様子で、家に寄ってくれと誘った。私はわなではないかと疑った。いつでも撃てるように、手をけん銃からいつときも離さずにいた。その家で、ウィリアムは自分の家族と私のもうふたりの兄弟、チャールズとソロモンを紹介してくれた。夕食をごちそうになったが、それはここ何カ月もお目にかかっていない上等の食事だった。パーレーズ・パークの親類から、私は好印象を受けた。ただ、たて続けの質問責めだけは、拷問に近いほどの苦痛だった。

ソルトトレーク・シティーまでは後2日で、

その夜はエミグレーション・スクウェアでキャンプを張った。親戚から良い印象を受けたにもかかわらず、私はまだモルモン教徒を恐れていた。翌朝には彼らの手に落ちることを予想し、捕虜になってせっかんされる子供時代の恐怖がそっくりよみがえってきた。長い夜だった。

正午頃、スパイサーがどうするつもりかと私に聞いた。「親父さんは、お前が聞いているような人間じゃないと思うぜ。」スパイサーが言った。「家族ってのはいいものだ。」彼は名残惜し気だった。私たちは意気投合していい友達になっていた。「冬はフォートフロイドにいるよ。もし来ることがあったら、いや、カリフォルニアで会うことになっても、いつだって大歓迎だぜ。」

私たちは互いに別れを交わし、ふたりとも涙を流した。私はスパイサーの隊が道を遠ざかっていくのをひとりで見送り、広場に立ち尽くしていた。

父に会わなくともよいから、その代わりに絞首台に上がれと言われたら、いさぎよく上がっただろう。私はだれとも話をする気になれなかったのので、歩道を歩かず道路の真ん中を行った。私はまだ、それがわなだと思ひ込んでいた。

シティー・クリークを渡り、1軒の家の所で止まって道を尋ねた。父はこの辺に住んでいると見当をつけていたので、父の代わりに異母兄弟のチャールズ・キンボールに会うことにした。玄関に出たのはチャールズの妻だった。夫はここからそう遠くない父の家畜小屋にいるという。

庭を横切っていく私を、窓や戸口から人が見ていた。多少おかしな格好だったの

だろう。着ていた服は私の^{いつちようら}一張羅だったが、着古しだった。ヒッコリー色のシャツに20センチも短いズックのズボン、靴下もつけずに靴をはき、つば広帽をかぶっていた。

チャールズは馬を馬車につないでいるところだった。彼は私を見てびっくりした。

「エイブ、ちょうどあんたを捜しに行くところだった。馬を戻してから、親父の所へ案内するよ。」

そのとき私は、いっそ大地が裂けて自分を飲み込んでくれたらと思った。その家に近づいていくと、ひとりの男がいて、それが父だとわかった。私は父を非常に恐れていた。

「父さん、息子だよ。」チャールズが言った。

父は身の丈1メートル85センチで、鋭い刺すような目をしていた。私の心を見通すような目だった。彼は父親らしいやさしい声で話しかけ、私を抱こうとしたが、私はそれを拒んだ。父は私に会えてうれしいと言ひ、父親のことがわかるかと聞いた。

私は知らないし、どうでもいいことだと答え、なるだけ早く解放されたいと思った。父はもし行きたいなら行ってもいいがと断わったうえで、私を家に招いた。何も言わずにしばらく私を見つめていた父は、沈黙を破って私に聞いた。

「いい服は持っているかい。」

その冬を私は父の家族と過ごし、学校にも行った。彼らの示す愛に、身にしみついたモルモン教徒に対する偏見や憎悪は薄れ始めていた。冬も深くなった頃、父はバプテスマを受けることは考えていないかと私に尋ねた。わからないと答えると、好きなようにしていいが、もし福音を信じている

ならバプテスマを受けてほしいと言った。

父の話では、母とエミリー叔母を残して出かける前に、兄のアイザックと私に祝福を与えた。私の頭に手を置いたときに、私がいつか山間のこの盆地へやって来て、その後アイザックを連れて戻ることを予言したという。父は、春になったら帰って、兄のアイザックを連れて来てほしいと言った。

バプテスマのことはそれから数カ月間話題に上らなかったが、あるとき、バプテスマについて考えたことはないかとまた聞かれた。私は福音や教会の温かさに心を溶かされるのを感じていた。それが正しいとわかった。私は父に、バプテスマを受けたいと返事をした。

私たちはシティー・クリークに向かった。水は冷たく、表面が凍っていたが、気にはならなかった。バプテスマが終わると、父は私に按手礼を施し、アイザックを連れ帰る召しに私を任命した。

1863年5月に私がもとの家に戻ると、祖父母や兄弟、友人たちが喜んで私を迎えた。帰宅から数日して、祖母とほとんどの家族が朝から友人の家へ出かけて行った。祖父は病気のため家に残ったのだが、私は留守の間そばにいてほしいと頼まれた。

ふたりきりになると、祖父はユタまでの旅について私に質問し始めた。父に会ったかと尋ねるので、会ったと答えた。それはよかったと言い、バプテスマは受けたかと聞くので、私は受けたと返事をした。驚いたことに、祖父は受けてよかったと言ってくれた。

「私はお前に、モルモン教徒や父親に対する偏見を植えつけてきた。」祖父は目を閉

じながら語った。

「今はな、その偏見を取り除くのが私の責任だと感じるのだ。私はヒーバー・C・キンボールがお前の父親だと知っていた。いいやつだった。だが、お前には知ってほしくないと思った。お前とアイザックには、私の生きている間は私の手伝いをしてもらいたかった。年を取って病気になるのはつらいものだ。お前はもう父親に会ってきた。それでいいのだ。私が悪かった。

ジョセフ・スミスは神の予言者だった。ブリガム・ヤングは正統の後継者だ。ずっと前からわかっていただけだ。良くないのは、自分が先頭に立ちたくて、人についていくことができなかったことだよ。私は自分の道を走って自分の最期に到着した。何を受けねばならぬのか、承知しているつもりだよ。」

祖父は再び目を閉じ、せき払いをした。

「アイザックを連れて父さんの所へ行きな。それが良いことだ。この福音に、モルモンイズムに、しっかり従っていくのだぞ。決して、決して離れるでない。お前を神の王国に救い、昇栄させてくれるのだ。」

祖父はそのとき、子供のように泣いていた。

父親について真実を知らされたアイザックは、ためらいなく一緒にユタへ向かった。祖父の話聞いてからほんの数日後のことだった。ソルトレーク・シティーに着くと、父は私たちを見て実にうれしげだった。私たちは喜んで家に迎えられ、それまでの人生で味わったことのない愛と居心地の良さを感じ、満足してそこに落ち着くこととなった。

私たちは クリスチャンです

七十人第一委員会会員

ロバート・E・ウエルズ




イエス・キリストの教会に生涯を捧げていらっしやる教会員の皆様が、世の中には私たちがクリスチャンであることを知らない人々のいることを知ったら、さぞ驚かれることでしょう。「モルモン」という呼び名と「末日聖徒イエス・キリスト教会」とを決して結びつけようとしない人々がいるのです。合衆国には現在もなお、私たち末日聖徒はキリスト教の一派ではないと言って人々を惑わし、自分でもそう信じている人々がいます。

私たちは常に、「自らの良心に従い、全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また、われらは、すべての人々にこの特権を許し、何所なりとも、如何様なりとも、または何

なりともこれを礼拝することを妨げず」(信仰箇条第11条)と言ってきました。私たちは人がその神を礼拝するときこそ最善の状態であると信じています。どのようなものを聖として信じようがその権利を尊重し、かつ私たちも同様の礼儀を求めるものです。このことから、次の声明は論争のために出されたのではなく、私たちがクリスチャンであると自認し、また他認されるに足る根拠を簡潔に述べたものです。

1. キリスト教の神と神会を礼拝しているので、私たちはクリスチャンです。「われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」(信仰箇条第1条) 私たちはほかになにものをも神としていません。(出エジプト20：3参照) 私たちは古代現代を問わず、予言者や聖人たちを礼拝しません。救い主がこの地上におられた間に教えられたように(マタイ6：9-13参照)、救い主の名前によって御父のみに祈りを捧げます。聖典にある通り、イエス・キリストを除いて神と人間との仲保者はなく、「イエス・キリストのほかにも、人間に救いを与えることのできる名は断じて天下にないこと」(II ニーファイ25：20)を教えてください。

2. 古代のキリスト教徒と同じように、刻んだ像もいかなる偶像も礼拝しないので、私たちはクリスチャンです。(出エジプト20：4-6参照) 真の生ける神を礼拝するのに、メダルを作ったり、古代の遺物や聖像、果ては十字架や人が造ったものを使うことは適当でないと考えています。もちろん公園や建物に像を飾ったり、救い主やそのほかの絵や写真を公の場に展示することはあります。しがし人の手になるこれらの物に、必要以上に宗教的な価値を認めるこ



私たちにあって日曜日は礼拝の日であり、日曜以外の日に済ましておくべきことはすばきではありません。

とはありません。

3. 古代のキリスト教徒と同様「主の名をみだりに唱え」ないので、私たちはクリスチャンです。(出エジプト20:7参照)また神についてのいかなる言葉も誤って使うことを認めません。人間関係においては、主の勧告にある通り「いっさい誓ってはならない」という教えを守っています。(マタイ5:34-37参照)日常生活の中で、神聖な名前を使ってみだりに誓いを立てません。むしろ私たちは率直で正直な人間関係を築いています。キリストに従う人々は、低俗で汚れた言葉を避け、神に関する表現もふさわしい場所以外では避けるべきであると思っています。

4. キリスト教の「安息日を聖とし」ているので、私たちはクリスチャンです。(出エジプト20:8-11参照)しかも教会にいる間だけではなく、終日を聖とするように努めています。主の聖日を汚すものは、スポーツ、各種の催し、狩猟やつり、仕事、諸々の活動など、いずれにしても反対の立場をとります。私たちにあって日曜日は礼拝の日、安息の日、学びの日であり、病人を訪ねるのによい時です。日曜以外の日に済ましておくべきことはすべきではないし、ましてや商品売買、商談、そのほか一切の商取引きをする日であってはなりません。

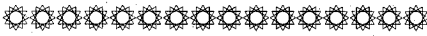
5. キリスト教の通りに「父と母を敬」い、祖父母やあらゆる時代の人々を敬っているのです、私たちはクリスチャンです。(出エジプト20:12参照)私たちは、子供たちの心をその両親(および先祖)に、両親の心をその子供たちに向けさせるように努めています。(マラキ4:6参照)あらゆる時代の人々を永遠の愛の絆で結ぶためです。また、神殿で永遠の結婚をすることを目標

にしています。神殿の儀式はキリストを中心としたものです。キリストを起源とするプログラムは、家庭や家族、さらに個人を強めるものであり、家庭や家族をサタンの方から守るよう努力しています。墮胎や同性愛、乱婚、飲酒、麻薬、暴力、不当な離婚など家庭や家族を破壊するものに、私たちは反対します。実に末日の予言者デビッド・O・マッケイは教えています。「いかなる成功も家庭での失敗を償うことはできない。」(「女性、誉れある地位」より)

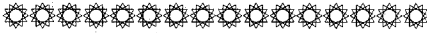
6. ユダヤ人のキリスト教徒に与えられた戒め「あなたは殺してはならない」(出エジプト20:13)と、キリストによって与えられたより高い律法「兄弟に対して怒る者は、……裁判を受けねばならない」(マタイ5:22)の両方を守っているのです、私たちはクリスチャンです。キリストは怒りや争いや不和を嫌われ、次のように勧告しています。「敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。」(欽定訳マタイ5:44-45)私たちはキリストのこの教えに従いたいと切望しています。

私たちが自殺に反対したり、母体に死や何らかの危険が伴う場合、あるいは強姦や近親相姦といったまれな場合を除いては墮胎に反対するのは、この戒めを尊重しているからなのです。また麻薬、アルコール、さらに心身共に破壊する覚せい剤を使って起こるいわゆる「ゆるやかな死」を認めることができないのも、この戒めを大切にしているからです。

7. ユダヤ人のキリスト教徒に与えられた戒めである「あなたは姦淫してはならない」と、キリストによるより高い律法「だ



神の栄光は光明と真理であり、
 いかなる程度であれ
 嘘や偽りのある人は
 神のもとに来ることはできません。



れども、情欲をいだいて女（異性）を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである」（マタイ5：28）の両方に従うよう努力しているので、私たちはクリスチャンです。クリスチャンは思いを制し、ポルノグラフィをはじめ不道徳で品性を汚すいかなるものにもふけることがないと考えています。婚前交渉やベッチング、ふさわしくないデートには全面的に反対するものです。結婚の当事者たちはどちらも無条件の清さをもって聖壇にぬかずくべきであり、徳と純潔と誠実こそが永遠に続く堅固な結婚をもたらすと信じています。

8. ユダヤ人キリスト教徒に与えられた戒め「あなたは盗んではならない」に従っているので、私たちはクリスチャンです。（出エジプト20：15；教義と聖約42：20参照）各人が正直かつ誠実で信頼に足る者となるように強調しています。予言者マラキの示すように、什分の一や献金を納めないことは神のものを盗むことになると考えています。（マラキ3：8-12参照）幾百万の人が什分の一の原則を実践しています。自分の知恵と知識だけに頼ってこの不確かな危険きわまりない世を安全に送ろうとするよりは、90パーセントに主の祝福をプラスして生活する方がより良いことを知っているのです。私たちはこのことを喜んで証で

きます。

9. ユダヤ人キリスト教徒に与えられた戒め「あなたは隣人について、偽証してはならない」（出エジプト20：16）に加えて、キリスト教徒の責任として常に「真の証し人」となるよう努力しているので、私たちはクリスチャンです。なぜなら神の栄光は光明と真理であり（教義と聖約93：36参照）、いかなる程度であれ嘘や偽りのある人は神のもとに来ることはできません。私たちがクリスチャンとして証する真理の中で最も大切なものは、イエスがキリストであり、私たちの罪のために死なれたこと、そして3日目によみがえり、生きてましますこと、ご自身の名前をつけた教会の頭として立たれていることです。私たちは主の福音が完全な形で地上に回復されたことを真に証する者です。この真理をすべての人に分かち合いたいと願っています。伝道の業はクリスチャンの伝統であり、私たちは喜んでこの業に参加しています。

10. ユダヤ人キリスト教徒に与えられた戒め「あなたは……むさぼってはならない」（出エジプト20：17）に加えて、キリスト教の予言者たちが教える賢明な勧告に従っているので、私たちはクリスチャンです。それは自立、非常時の備え、必要に応じた速やかな隣人への援助であり、教会が福祉に使うお金を献金として喜んで捧げることです。そうすることで、私たちはむさぼらず、人にも私たちのものをむさぼらせる口実を与えないのです。

11. 「人は皆各々其身おののおのそのみにてなしたる罪とがに対して罰を受け、アダムのの咎とがに対して罰を受けざることを信」（信仰箇条第2条）じているので、私たちはクリスチャンです。私たちは自分の行ないに対して責任があり、自

分の働きに応じて裁かれるために終わりの日に神の前に立つことをよく承知しています。(黙示20:12参照) また、救い主が「天にいますわが父の御旨を行う者」(マタイ7:21)を喜ばれることを信じています。このキリスト教の原則は、私たちがより良い人生を歩む励みとなり、世にあって善をなさしめる原動力となっています。

12. 「キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず」(信仰箇条第3条)るので、私たちはクリスチャンです。これ以外に救いの道はありません。

13. 「福音の第一原則と儀式とは、第1、主イエス・キリストを信ずる信仰、第2、悔改め、第3、罪の赦しを受くるために水に沈めらるるバプテスマ、第4、聖霊の賜を授かるための按手礼なることを信ず」(信仰箇条第4条)るので、私たちはクリスチャンです。これらはすべてキリストが根本です。

14. 原始教会と同様にキリスト教の聖職の按手を信じているので、私たちはクリスチャンです。「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行なうためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」(信仰箇条第5条) 聖職への召しは「だれも……自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるので」(ヘブル5:4)す。言い換えれば、私たちは主の職に自分で自分を召すことはないのです。

15. 「教会には、初期の(キリスト)教会に在りだると同一の組織、すなわち使徒、予言者、監督、教師、祝福師等のあるべきことを信ず」(信仰箇条第6条)るので、私たちはクリスチャンです。同様に、新約聖

書に述べられているほかのすべての職、執事、監督、祭司も信じています。あたかも初期の教会がそうであったように、現代のキリストの教会は「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石」(エペソ2:20)であると信じています。そして末日聖徒イエス・キリスト教会こそがまさしくそれであることを証します。

16. 初期の教会にあったと同様のみたまの賜、すなわち「異言を語る力、予言する力、啓示、示現を受くる力、病を医す力、異言を訳く力等の賜」(信仰箇条第7条)を信じているので、私たちはクリスチャンです。

17. 「正確に翻訳されたる限り、聖書(旧・新約聖書共に)は神の御言葉なりと信ず。またモルモン経(英文)も神の御言葉なりと信ず」(信仰箇条第8条)るので、私たちはクリスチャンです。聖書が旧世界のキリスト教の予言者たちによって書かれたように、モルモン経も新世界のキリスト教の予言者によって記されたキリスト教の聖典であり、イエス・キリストを新しく証するものです。また聖書と何ら矛盾することなく、救い主に関する情報がさらに数多く追加されています。

18. 「すべて神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうことを信ず」(信仰箇条第9条)るので、私たちはクリスチャンです。私らはキリスト教の予言者たちを信じ、「昔の時代のように今の時代にも、またこれから先の時代にも、昔の時代のように」(I ニーファイ10:19)絶えざる啓示があることを信じています。キ



キリストの愛は、すべての人に及び、キリストは古同様、今日も私たちの羊飼いでであると確信しています。

リストの愛はすべての人に及び、キリストは古同様、今日も私たちの羊飼いでであると確信しているからです。

19. 栄光のうちにキリストが再降臨され、「御自ら地上に王となりて治めたまい、地球は元にあたまりて樂園の栄えを受くることを信ず」(信仰箇条第10条)るので、私たちはクリスチャンです。

20. すべてのキリスト教徒が目指す生活信条は、「正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。……もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるもの」(信仰箇条第13条)であると信じているので、私たちはクリスチャンです。私たちは山上の垂訓や八福の教え、あらゆる救い主の教えに具現されているキリストの徳を受け入れ、実践しようとしています。心をつくし、勢力をつくし、思いをつくし、体力をつくして主に

仕え、神の栄光をまごころもて仰ぎみて、信仰、慈悲、仁愛、徳行、知識、節制、忍耐、兄弟の親切、敬虔、謙遜、勤勉などの諸徳の模範となるべきことを信じています。(教義と聖約4：5参照)

すなわち、私たちは次の理由でクリスチャンであると宣言します。「私たちは……キリストを信じる……確く信じてキリスト……を待ち望んでいる。……私たちはキリスト……によって生かされている。……私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し……キリストの与えたもう生命を待ち望み、……正しい道とはキリストを……信ずることを言うのである。キリストはイスラエルの聖者である。それであるから、あなたたちはキリストの御前にひざまずいて勢いと心と力とをつくし、全身全霊をこめて、キリストを拝さなくてはならない。」(IIニーフアイ25：24-29)

人との比較

アニヤ・ペイトマン

他人ではなく、
自分の物差しで
自分の進歩を測ること

「きのうの朝、家庭訪問に出かけるときはいい気分だったのに、帰りはがっかり、みじめな気持ちだったわ。」メアリー・アンが友人に打ち明け話をしました。「アンドリアのお宅はきれいにお掃除されていて、子供たちは信じられないくらい礼儀正しいの。この先3年間の子供たちの誕生パーティーがもう計画済みだっていうし。私なんて、家に帰れば朝ごはんのお皿が汚れたまま、ベッドの始末もまだ、子供たちにどなり散らして1時間も泣いてたのよ。アンドリアの担当をどなたか別の人に変えていただこうと思うの。私にはとても無理だから。」

ジムが妻に話しかけています。「ジャクソンさんち、また新しい車に乗ってるの、知ってるかい。3年もたたないっていうのに新車のセカンドカーだよ。どうやってやりくりするんだろう。よほど金もうけがうまいんだな。それに比べると我が身が情ないねえ。8年も同じ車だ。」

「兄さんのお嫁さんが作っている覚えの書はなんてすばらしいんでしょう。」ミシェルはふうっとため息をつきました。「とって

も芸術的で、何をしても才能があふれている。お姉さんの本を見たら、とても自分のが見られない。もうこれっきり見たくないわ。」

自分を他人と比べるとき、困ったことにこのような無能感や落胆あるいは嫉妬を大勢の人が感じます。比べるなどと言ってもむずかしいことですし、ひき比べては自分をみじめに思うことが多いのです。「私はどうしてこうなのか。どうしてあんなふうになれないのか」とか、「彼は幸運をひとり占めにしている。不公平だ」と感じます。知っているだけかが活発に活動しているのを見て、そのようにできない自分をうしろめたく思うこともあるかもしれません。それがこうじて、「どうせ自分は」という態度、「自分にはとうていあんなふうにできっこない。何を今さら」というあきらめにつながることもあるのです。

そこで私たちの気持ちを軽くしてくれるのが、よく知られた「『でもね』のゲーム」です。「そうよ。でもね」と彼らは言います。「そうよ。でもね、アンドリアは子供が3人、あなたは4人でしょ。しかも年が近



概して私たちは、
最良のときの他人と
最悪のときの自分を
見比べるものです。

いから面倒を見てくれる子がいないもの。」メアリー・アンの友だちが彼女を慰めます。「それに、アンドリアはお客様が来るのを知っていたんだと思うわ。」

「そうね。けれどあなたは教会の仕事にもっと時間を使っているわ。」ジムの妻はこう言います。「お金もうけばかりに集中してないってことよ。」

「そう。でもね、あなたはお菓子作りと洋裁がとても上手よ。ほかにたくさんできることがあるじゃない。」ミシエルの友達が励ましてくれます。また私たちも、ときどきは自分を慰めることがあると思います。「そうよ、だけど私の家は古くてもっと大きいから、仕事もそれだけ大変なのよ」と。

しかし、ここで、「そうね。アンドリアは家庭管理の才能があるわ。すばらしいわね」とか、「ジャクソンさんは経済の天才ね」とか、「ええ、きれいな覚えの書だわ」という言葉がなかなか聞かれないのは、何ともさびしいことです。

相手を自分と同じにひき下ろすことが危険なのは、人々の長所に対する補いに、あら探しをすることが多いからです。私たちはこう考えます。「しっかり者のベギーは何でもできる。きれいでチャームングで才能がたくさん。でも、良い母親ではないはずよ。どこか欠点はあるはずだわ」と。そして、「完璧な」人に弱点を見つけると、興奮のあまり口をつぐんでいられずにそれを言い広めることもあります。

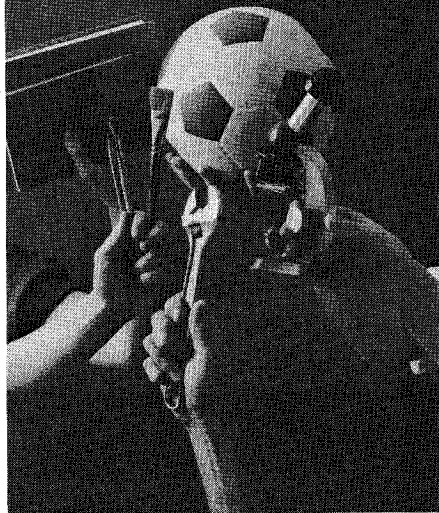
ところが、私たちが人を慰めようとして普通に言っていることの多くは、真実に立脚していません。

立場は皆違います。住む家が違い、背景が違い、家庭環境が違っています。一見して同じような場合でも、違いはあるもので

す。ノーマは買物上手を自負していましたが、同じ年頃の同人数の子供がいる近所のアンから1カ月の食費を聞いてびっくりしました。自分の家よりずいぶん少ないのです。ノーマは、私たちにもよくあることですが、無意識のうちに自分が悪いと決めつけました。そしてさっそく、なぜそんなに違うのか、自分のどこが良くないのかを調べ始めました。節約できる点を探し、ぜいたく品をもっときりつめようとなりました。そうして見直しをしてから、ノーマは忘れていたことに気がついて、つい笑ってしまったのです。答えは簡単でした。アンのご主人が出張のため、1週間留守だったのです。食費の違いはそうした事情のせいだったのに、ノーマはいたずらに自分を責めてしまったのです。

概して私たちは、最良のときの他人と最悪のときの自分を見比べるものです。ビルはベクステッド家に立ち寄っていたいへん驚きました。トムがグリースで汚れたつなぎの服を着ているのを見たからです。3歳の子は泣きわめき、十代の子は音量を上げてテレビを見ていました。家の中は多少散らかり、ベクステッド姉妹は髪にカーラーを巻いていました。

ビルは批判も決めつけもしませんでした。逆に、比較することについて大事なことを学んだのです。「私は教会でのトムしか見ていなかった。いつもすきのない身なりで身だしなみが良いため、日頃の生活もそんなふうにすぎがなく、世間一般の問題とは無縁だと思っていたようだ。家庭でのトムを見て、何だかほっとしたよ。それでもトムを尊敬する気持ちは変わらない。立派な人だ。今まで想像していたよりも彼が身近に感じられるのがかえってうれしい。さて、



教会の人たちは私のことをどんなふうに見ているのだろう。」

自分よりも他人の特性や成功を認める方がずっと簡単です。「私の才能などというのは地面のずっと奥に埋まっているのよ。掘り出すには地球の反対側から始めなくちゃ。」オードリーは友達のリンダにこぼしました。リンダはびっくりしたようでした。「冗談でしょ。あなたは生まれつきの指導者よ。あなたを見るとみんなが頑張ろうと思うわ。きちんとしているのに、それを見る人に窮屈な気持ちや自己嫌悪をちっとも感じさせないのよ。それが才能でなくて一体なあに？」

できることや持っているものよりも、できないこと、持っていないものに心が集中するようになると、そこはサタンの良い仕事場になります。私たちはだれでもその人なりの賜や祝福を持っているのです。それが何であるかを知って認めること、このことが大事です。

たしかに、お互い同士慰め合うときの言葉にはなるほどと思うものもありますが、

「天びんのつりあい」を取ろうとして普通見落としている、あるいはむしろ顔をそむけてさえいることがほかにあります。

本当は、私たちは人と競争するためにこの世にいるわけではありません。勝ったり負けたりゲームやスポーツでは競争は楽しいものです。しかし、人生にあっては一人一人が皆未来の勝者です。他人が勝れば当然自分が負けるといったものではありません。もしも自分の進歩や価値を、他人と同じだとか他人よりも優れているとかで測るとすれば、それはまるで、「自分が書くよりよほど上手にすべてが書かれてしまっているから」と仕事を放棄した若くて有能な作家と同じです。もし人々がこのような態度でいたとしたら、文学や美術や音楽の傑作は生まれなかったことでしょう。

天父は、私たちが自分の価値や進歩を測るのを一番良く助けてくださる立場にあります。神殿に入り、聖典を学んで主に近づき、祝福や心からの祈りを通じて主の言葉に耳を傾ければ、私たちは自己を確かに認識できます。ジャンニスは自分自身や他人からの期待に^{こた}えられないで、自分のふがいなさにいらだち、やましい思いでいたときに、天父の助けを求めました。「天父に近づくとたびにだんだん、自分の期待というものがどんなに上すべりなものがわかってきて、人が持っている長所や才能を全部自分も持つ必要はないという簡単なことがわかったのです。」彼女は言っています。「天父に近づいたおかげで自分に何が期待されているかがすっきり自覚でき、天父の娘としての本来の価値や可能性を知りました。欲求不満は平安に変わって気持ちが安定しました。」

しなければならなかったひとつの競争

人を信頼し、励まし、
その進歩を喜ぶとき、
私たち自身の進歩や発展が
容易になっているのに
気づくはずです。

は、自分との競争です。私たちの持つ才能や特性になぜ相違があるのか、その理由のすべてはわかりませんが、理解すべき大切なことは、人は個人個人で自分の道を歩んでいくということです。人と競争するのをやめるとき、私たちの進歩は早まります。深い落胆に沈むことなく、前向きでいられます。去年の自分、先月の自分、先週の、そしてきのうの自分よりも良くなろうと努めることができるのです。

メラニーはこの大切なことを学びました。「私は子供の頃、いつも姉ばかりを見つめて育ちました。姉はピアノが上手で、歌やダンスができ、絵も描けば詩も作ります。自分にどこか姉より優れている所はないかと考えてみても、何も見つかりませんでした。それであきらめました。

結婚してふたり目の子供に恵まれた頃です。自分には才能がないという気落ちした思いを、どうしてだろうと考え始めました。私はそれまでずっとピアノを弾きたいと思いつつながら、姉があまり上手なので自分もレッスンを受けたいとは思わなかったのです。ようやくある日、そのことに気づきました。姉さんがピアノを上手に弾けるからって、それがどうしたというの。そんなことはどうだっていいじゃない。自分が弾きたいんだから、弾こうって思いました。

そこで実行しました。姉はむずかしいク

ラシックを練習しているのに、自分が単純なメロディーに苦労しているのは初めこそ気分が良くありませんでしたが、そのうち音楽の楽しさがわかってきて、そんなことは気にならなくなりました。姉のように上手には弾けないし、これからもそんなに上手にはなれないかもしれません。でも、毎日自分なりに音楽で充実感が得られれば、上手下手は二の次です。人の立派なのを見て自分の進歩を遅らせてきた私ですが、これからはそうではないのでとてもうれしいんです。」

タラントのたとえに言われている教えは明白です。何を与えられたかよりも、与えられたもので何をしたかという方がより重要なのです。5タラントと2タラントを渡された僕は、そのお金を活用したので、どちらも主人にほめられました。叱られたのは、渡されたタラントを地中に埋めておいた者でした。(マタイ25:14-30参照)

人の成功や良い点を認めることができると、私たち自身の人生が豊かになります。大画家や作家、科学者、音楽家、哲学者、慈善家など、過去の偉人の中から自分に良い影響を与えてくれる人物をあげるのは簡単です。しかし、私たちが日々交わる「平凡」な人々の中に、才能や技術をみがくのを助け、自己を啓発してくれる人がいるのです。自分とだけ競争するとき、私たちは他人の業績や特性を、より高いキリストに近い心で理解することができます。自分は自分の道を進むのだと言えるとき、否定的な感情は消えていきます。だれの業績であれ、立派なことには喜びを覚えます。自分を含めて、どんな人の進歩をも喜ぶことができるのです。

キャロラインは美術展に出かけて、友達

の作品にねたましさを感じました。そのとき彼女はこう思いました。「どうしてそんなふうを感じるの。リネットの才能を知ることができて良かったじゃない。すばらしい作品ができあがったことを喜んで、そこから学ぶべきだわ。」

一緒に努力し、高め合い、励まし合えば、進歩の道はどの人にとってももつと楽で楽しいものになります。それぞれに歩む道は違っていても、ほかの人を励ますことができるのです。人々を心から愛し、その成功を願うとき、彼らは私たちが自分の傍らにいと感じるでしょう。そしてそうするとき、私たち自身の進歩は決して妨げられません。かえて、道がはっきり見えてきます。スペンサー・W・キンボール大管長は、己を失うことが己自身を見いだす最良の方法であると教えています。

「私たちは同胞のために働くとき、そのことで同胞を助けることができるばかりでなく、自分自身の問題をも新しい観点から眺めることができるのである。私たちは他人のことにもっと関心を向けるようにすれば、自分自身のことで思いわずらう時間は少なくなる。奉仕の中にこそ主の約束があり、自分の命を失う者は、それを得るのである。(マタイ10:39参照)

このように私たちは、奉仕を通して、人生における指針を見つけるという意味で自分自身を『得る』が、そればかりでなく、適切な方法で同胞に仕える度合いを深めると、それに応じて心に充実感を覚えるのである。そして人々に仕えるときに、さらに意義ある存在者となる。実に、得るべきものは多くあるので、自分自身を得ることは簡単である。」(『小さな奉仕の業』「聖徒の道」1976年12月号、p.541)

ジムは、立派な教師の才能が生まれつきのものかどうかと尋ねられたとき、にこっと笑って言いました。「いいえ、とても。初めは怖くてどうしようもなかったですよ。自分を語るのがおそろしかったですねえ。自分のことを考えるのをやめて、どうしたら生徒たちを助けられるか、生徒を励まして可能性を開かせるにはどうしたらいいかを考えて祈るようになってから、ようやく良い教師になれたように思います。」ジムは自分を「失って」、自分を「得た」のでした。

先日、初めてのレッスン、それも靈感豊かなすばらしいレッスンをした扶協会の姉妹に、友達が話しかけていました。心が高められる会話でした。「とてもできないって言ったのに！あんなに靈感が感じられたレッスンは初めてよ。」

「だって、あなたの顔を見たら、すっかり頑張ってるっていう気持ちがあふれているんですもの。それじゃ頑張らなくちゃいけないじゃない。」初めの姉妹が言いました。「ありがとう、姉妹。お祈りの答えがきょうのあなただったわ。」

人々を励ます以上のどんな奉仕が、私たちにできるでしょうか。人を信頼し、励まし、その進歩を喜ぶとき、私たち自身の進歩や発展が容易になっているのに気づくはずですよ。そうするとき、人々が人生に喜びと成功を見いだすように助けられた救い主に、私たちもなろうのです。人を助け、私たちを助けながら、主ご自身もご自分の高い可能性に向かって進歩しておられました。

(教義と聖約93:12-14参照)

*アニヤ・ベイトマン：4児の母、ソルトレーク・シティー内のワード部の日曜学校教師

古典講話

魂の闘い

メルビン・J・バラード

ソルトレーク・タバナクルにて、1928年5月5日



3 週間前のきょうの午後、総大会の一般の部で、私は末日聖徒および世の人々にとつて関心の深いいくつかの事柄について話をさせていただきました。かの靈感に満ちたアメリカ大陸の予言者、キリスト誕生の600年程前にこの世代に向けて語ったニーファイの言葉についてでした。きょうはその続きをしたいと思います。できればその教えの精神にのっとり、またそのために、まずII ニーファイ28章から数節を読みたいと思います。

「またまことに『われらは明日死ぬかも知れないから、飲んだり食ったりして楽しむ、そうすればわれらは幸福で満足である』と言う者が多くあり、

『飲み食いをして楽しみ、しかし同時に神をおそれよ。神は小さな罪を犯すことば許したもう。それであるから少々偽を言い、人の言葉につけ込んで欺き、隣人をおとし入れる穴を掘れ。これは少しも悪い事ではない。われらは明日死ぬかも知れないから、すべてこのようなことをしても差支えない。たとえ、われらに罪があると認められても、神はわずかにわれわれを鞭うちたもうだけであつて、われらは結局神の王国に救われる』と言う者も多くある。」(II ニーファイ28：7-8)

19節から読みます。

「悪魔の王国は必ずゆる動き、またこの王国に属する者たちも必ず動かされて悔い



改めなければならない。そうでなければ、かれらは悪魔の永遠の鎖に固くしばられ怒らされて亡びてしまう。

ごらん、その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ、またこの人たちに善い事を怒らせる。

またほかの人々をなだめ、この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせるから、その人々は『シオンの中では万事よろしい。シオンは栄えて実に何事もみなよろしい』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。

悪魔はまたほかの或る人々にへつらってこの人々を迷わせ、地獄はないものであると言い、また悪魔はないものであるから私

は悪魔ではないと言い、このように耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう。」

(II ニーファイ28:19-22)

私は2年前にウェルズ長老、プラット長老と共に、南米で教会の伝道部開設の仕事をしていました。その間、じっくり考え、勉強する機会がありました。「離れば、見るものはみな美しい」という言葉がありますが、理解は一層明晰に、と言えることもあると思います。そこは教会本部から1万8千キロ離れていて、物事がよく見えました。なじんだ世界を後にして、別の新しい世界へやって来たのです。言葉が違いました。人々の習慣や、空や大地、すべてが違っ

平和と繁栄、それは人類が経験する 最も危うい時代です。

ていて珍しく見えました。まるで自分が、この世を去って、その時が自分にやって来たらきつと考えるであろう様々な思索や反省にふける人のようでした。スペイン語の勉強に限らず、いろいろ本を読む時間がありました。聖書やモルモン経、教義と聖約、それに教会歴史の6冊を含めて、手に入る英語の本を實によく読みました。教会の発展や現在の状態、さらに将来の姿をあれこれ冥想していたときです。ある思いが非常にはっきりとした形をとって頭に浮かびました。大勢の人間が危険にさらされる時代が来るという思いです。私は教会員の幸せのため、実に同胞たちのために心底から願って、主に約束しました。もし主が私に知恵と力を授けてくださるなら、人々を脅かすこの危険について、私は声を大にして人の子らに警告しますと。

私は、この危険な時期の到来のしるしがわかります。それは平和と繁栄のときにやって来ます。ちなみにそれは、人類が経験する最も危うい時代です。多くの人が苦勞の時期に断固として信条を守りながら、しかし独立の時期、繁栄の時期が来るといかにもたやすく、それらの高い標準を忘れて繁栄や成功におごり、意のままに肉欲を満たそうとするのです。それは国家についても同じです。

こうして私は全世界が、新しい秩序が現われる放縱の時代に近づきつつあることを

痛切に感じています。また、教会自体も私たちの経験するその新しい時代の波を受けることがはっきりとわかります。しかし、注意すべきは人の圧力だけではないこと、人の心に影響を及ぼし、生じて来る問題の解決にあたって人々を動かす種々の力があることも、よくわかるのです。

御父に忠実な息子、娘の第一陣が地上に生まれて来ようというとき、彼らは確かに警告と注意を受けました。私たちはふたつの新しい経験をすることになっていたので、その第一に、肉の幕屋を得るはずでした。それまで持ったためしがありませんから、それは私たちにとってまったく不思議なものでした。私たちは、肉の幕屋を得、それを自分の僕とするよう、自分が幕屋の主人となって、それを尊び、従わせるように命じられました。

(第二に)今は多数派となった敵の前にさらされることとなりました。もし私たちの眼が開けて、自分を取り囲む勢力を、私たちに影響を及ぼそうとしているその勢力を見ることができたなら、助けなしにひとり歩きをする勇氣はとても持てないでしょう。その勢力は私たちの周りにあり、彼らの長、墮ちた神の子がねらった地位を奪うという明確な目的成就を目指し、影響力を行使しているのです。彼が墮ちたとき、諸天は彼のために泣きました。彼は悪魔ルシフェルとなりました。

ルシフェルの目的は、彼がしたことによく示されています。たとえば、主が試みに遭われたときのことを考えてみてください。主がバプテスマを受けられた後、だれひとり行く先を知らないのに、このねたみ深くて貪らんな兄弟はそれを知り、主の肉体が弱ったときに姿を現わして誘惑しました。しかしながら、この誘惑の争点は、石をパンにすることで宮の頂上から下へ飛びおりにすることでもありませんでした。それらは係争中の大きな問題のほんの序章でしかありませんでした。イエス・キリストの心をパノラマのように世界の国々がよぎり、誘惑者はそれをみな与えると言いました。彼は、イエス・キリストが世に来たのはひとつには世を治める権利を得るためであり、イエスが、王の王、主の主となる権利を得るために自らの命を捨てると申し出られたことを知っていました。この誘惑者はその栄誉と特権を、ただひれ伏して悪魔を拝むだけでたやすく与えるとイエスに言ったのです。「これらのものをみなあなたにあげよう。カルバリで死ぬ必要はない、ただ私を拝みなさい。これらはみな私のものだ。それがあなたのものになる」と。この試みの最中に、足をすくおうとわなを仕かけている者のことをかりにイエスがおわかりにならないでいる瞬間があったとしても、イエスの次の言葉でその疑惑はすべて消えてしまうのです。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4:10) こうして、悪魔はイエスから離れました。

この世の国々を与えようと言ったサタン

は、その場限りで、ともかくも国々を支配してはいましたが、その権利は無効なものでした。イエス・キリストがたとえその称号を自分にお受けになっていたとしても、それはまやかしであり、価値のないものであることをすぐにさとられたことでしょう。この世の国々を治める正統の権利と称号を得るために、主はご自分の命を捧げられました。しかし、問題はまだ片づいていません。世の国々を治める権利を得ることは依然として、始めに負け、主イエス・キリストのみ業にも敗退した反逆者の目的であり、それこそが地上における彼の仕事なのです。

そこで、1820年の春、時満ちて、あらかじめ予言者たちについて知らされていた通り、ひとりのみ使いが地に住む人々に宣べ伝えるべき永遠の福音を携えて中空を飛び、主の大いなる恐るべき日の来る前にエライジャが地上に遣わされると言われたその時が近づき、ダニエルの解き明かしたネブカデネザルの夢にある予言が、もはや滅びることもほかの民に渡ることもない王国の建設となって輝ける成就を迎えました。そのとき、やって来たその「時」が、在天の神ばかりか、地上を治める権力者たちにも知られたのです。それで主がご自身を現わされる前に悪魔が来て、これらの約束を実現する器となるはずの少年を襲い、彼を滅ぼそうとしました。

今にも迫って来る滅亡は頭だけのものではなく、現実の実体を持った強力な力が彼を捕らえました。サタンは神のみ業を妨害しようと願っていたのです。サタンは、神から世に遣わされる使者、最後のこの福音

の神権時代の始まり、すなわち転がりいでてついに全世界に充ち満つる業の始まりに際して訪れを受けるべきこの使者をなきものにして、自分にとっての凶^{まよじつ}日^ひを先へ延ばそうと望みました。それが破滅への道の始まりでした。悪魔の軍勢がみ業の伸展、その発展と成長を阻止しようとねらったのは当然のことでした。

しかし、神もこの「時」が来たことをご承知でした。神と御子イエス・キリストは少年を訪れて、キリストとその教会が世を従わせ、王の王、主の主として地上に君臨することを究極の目標としたこの大いなる福音の神権時代を開かれたのです。

かくて予言者の最初の争闘以来、対立は常に教会を取り巻いてきました。私たちはあらゆる種類の逆境を切り開いて進んできました。群衆の暴力、殺人、迫害、投獄、市民権の剥奪、様々な災難や障害を通してみ業を阻もうとする試みにも、それが不可能であったことを知って、サタンは新しい方法を用いようとしています。そこが私の強調したい点です。なぜなら、敵がこれで満足してはいず、戦いをやめせず、新たな手段に訴えてこの業を滅ぼそうとすることを、私ははっきりと見たからです。皆さんに申しあげたいと思います。慢心しているサタンは、最後には自分が勝利を取めて世の王になると考え、そう確信しています。古の予言者たちは、この問題が治まる時の来ることを予言しました。幾人かはその戦いをハルマゲドンと呼んでいます。呼び名はどうかあれ、だれが統治権を得るかという問題が解決する時はやって来ます。生

者死者を問わず、すべての義人はこの戦いに関心を寄せ、関与します。悪人も、生者死者を問わず同様です。

その結末はどうなるでしょうか。いつその時が来るかはわかりませんが、このことを私は知っています。その対立のしるしが速度を早めて来つつあること、対立は確かにやって来ること、そして、日々がそのための準備に費やされていることです。私たちは、自分たちが全世界の関心を一点に集めていると知れば意外に思うことでしょう。しかし、それは、世界史上偉大かつ重要で、しかも決定的な時が近づいているからです。

だれが統治権を得るかの問題に決着をつけるこの迫り来る対立に備えて、強力な軍勢が双方で隊伍を組みつつあります。一方、一個の實在としての悪魔について言うのですが、彼の存在を否定する人々がいて、それはニーファイが、悪魔は人々にさきやいて「悪魔はない」と言わせ、彼らに「私は悪魔ではない」と言うと言った通りです。末日聖徒に関する限り、私たちは悪魔が化け物で、長い角やしっぽやひづめを持っているとは考えていません。まったく違います。彼は外見は紳士で、もしも会うことがあったなら、一度やりすごした後で振り返って見ることでしょう。悪魔は私たちよりも物知りです。彼は実在者です。確かに個人として存在しています。神が生きておられるように確かに悪魔も生きています。人を欺こうが、自分はいないと信じこませようが、悪魔は確かにいます。そして今、動きはかつてなく活発です。さて現在、悪魔は何をしているのでしょうか。彼は世界各



主がご自身を現わされる前に悪魔が来て、
……約束を実現する器となるはずの少年を
襲い、彼を滅ぼそうとしました。

地に武装した徴兵基地を持ち、兵がいると申しあげます。大勢の軍兵です。悪魔は、戦いが起きたら過半数を擁して成功を取めようという無益な野望を抱いて、大戦争に備え、男や女を味方に引き入れていきます。

だれがその味方に入るか、どれだけの人間が彼に付くか、お話する用意はありませんが、その戦いの最後は始めの時の結果と同様にはっきりしていることが、全能者の靈感により、自分が生きている通り確かにわかります。悪魔が初めに墮ちて天から投げられたことは事実です。そしてまた、彼が味方をどれだけ多く集めようと、戦いがいかに熾烈しつれつであろうと、悪魔は敗れて地上から追放され、その地位を追われることも事実です。キリストは来臨したまい、主権を求め、そして統治し、支配されます。

ところで、私の関心は戦いの結果ではなく、自分が悪魔の側に付くか、主の側に付くかということです。おのおのが自分自身を省みて、自分が主の側にいるかどうかを見つめるのは、今が好機です。兄弟姉妹の皆さんに申しあげたいと思います。私たちの靈魂の敵が私たちを捕らえようとして謀るすべての攻撃は、どれも肉によります。なぜならば、肉は贖われない土から作られており、悪魔は土の元素を制する力を持っているからです。彼が私たちに接近する方法は情欲や欲望、肉の野望を通じてです。この闘いで私たちに差し伸べられる主からの援助は、肉体の内に宿る霊を通じてすべてがやって来ます。このように、これら2大勢力はこのふたつの経路を通じて、私たちに働きかけているのです。

あなたの闘いはいかがですか。世の人々の闘いはどうでしょうか。これは重要な質問です。

男女おのおのにとって最大の闘いは、(敵がたとえ多くともその数は問題ではありません)自分との闘いです。

私は霊と体を、「私」と「それ」というふう呼びたいと思います。「私」とは、体の中に住む自分です。この体を持つ前から生きていて、体から出てもなお生き続ける自分です。「それ」は私が住む家、肉の幕屋です。大いなる闘いは「私」と「それ」との間に行なわれます。

週に一度、自分を見つめて吟味し、闘いがどうで、「私」と「それ」のどちらが優勢であるかを考え、そして自分に判決を下し、誤りや短所を正し、自身の家を整えるのはすばらしいことであると、私は共に働いた宣教師たちに長年語ったものです。わざわざその約束を作る必要はありません。主が教会員一人一人にその時間を作ってくださいました。安息日がそれです。聖餐会のとときです。裂かれた体と流された血の象徴が用意されるのを見るとき、それは、各自が自身とひそかに会談し、自分は罪を犯したかどうか、誘惑に負けてはいないか、悔い改めるべきことはないかを問い、もしあれば、ふさわしくないまま手を伸べて、その神聖な象徴を飲み食いしないように、自分をすすぎ、魂を清め、兄弟姉妹および主と和らぐための時間です。

「私」と「それ」と、どちらがこの闘いに勝つかを決めるもうひとつの機会を、主はこの教会の会員に作ってくださいました。

もしあなたが強い霊を持ちたければ、
霊の食物をとり、
霊の運動をするように気をつけることです。

それは、2食の飲食を断つ第一日曜日です。そのときが近づくと、「それ」は食べ物をとらないではいられないと文句を言います。

「頭が痛くなる、ひざが震える、気分が悪くなる、あまり長い断食はできない、少しくらいは食べなくてはだめだ」と。あなたはそれに屈しますか。屈するなら、どちらがあなたの主人になるか、どちらが勝利を得るかがわかります。月に少なくとも一度、「私」と「それ」とが事の対決場に赴いて、「私」が自分の住む家、自分の僕である「それ」に向かい、「2食なしでもやっていける。体を損なうことはない。むしろ有益だ。私の頭が痛もうが、気分が悪くろうが、死ぬことはない。私はあなたより大きい。月に一度、私はあなたに自分が主人であることを示そう」と言うのは、すばらしいことです。それによって、明日何かほかの欲求が起きたときに、それに抗するいかに大きな力が与えられることでしょうか。酒かタバコか、あるいはほかの肉欲かもしれません。しかし自分はずでに、住む家に対して、「この幕屋を汚してはならない。私は体を清く保つのだ。この体は汚させない。それは私の僕、清くなければならぬ」と言うだけの力を得ているのです。

ところが、霊をよく養っていなければ、その闘いがどう進むかわかりません。私たちは適当な食物と運動なしでは、体について言うのですが、成長しないことを知って

います。もしあなたが体を支配する強い霊を持ちたければ、霊の食物をとり、霊の運動をするように気をつけることです。

霊の食物は、どこで得られるのでしょうか。先ほど私は、教会員が週に一度聖餐の卓に着き、主イエス・キリストの裂かれた体と流された血の象徴を飲み食いするとお話ししました。それは肉体ではなく、霊のために祝福された象徴です。ふさわしい状態で飲み食いする人は、霊の命を飲み食いするのです。私たちは、祈りによって、ひそかな祈りや家族の祈りによって、日々主を求めようにも命じられています。そのとき何が起こるのでしょうか。私たちは目を閉じて外界をさえぎり、魂の窓を開けてみたまの祝福、霊の力を自分に引き込むのです。そして私たちの霊の命にこの力が注がれます。霊の食物にこうした機会が提供され、霊の運動は隣人への奉仕によってもたらされます。

霊のために食物もとらず運動もしていない人は、やがては霊的な虚弱者となり、肉がその主人となるでしょう。したがって、霊の食物と運動の両方を得ている人ならば、だれでもこの体を統御し、それを常に神のみこころに従わせることでしょう。

悪魔が私たちを捕らえようとして仕かける攻撃は、肉体を通してであると申しあげました。それが接触の手口なのです。鎖の強さは一番弱い環の強さでしかない、とい

うことわざをお聞きでしょう。鎖は最も弱い箇所です。たいがい、私たちの弱い箇所は、肉にあるのです。悪魔はその弱い環を知っています。そして魂をとりこにしようと企てるとき、その弱い点を叩くのです。ほかが強くて、強い所は決して攻撃しません。

ある折に、オレゴン州の森林を歩いたことがあります。そのときに、ほかの木はどれもしっかり立っている中で、見たところ異常がないのに、1本だけ枯れて倒れている巨木がありました。近くに寄って調べてみると、外からは見えない樹皮の内部が、長い間にむしばまれてきたせいだとわかりました。1匹の虫がピンほどの穴をあけ、その大木の端から端へ横断したのです。こうして弱い環が作られ、何かの小さな力が加わったときにその巨木は倒れ、弱さを露呈しました。人間といかに似ていることでしょうか。公明正大、実直な人は大勢います。外からはどう見ても強い人、しかしひそかな弱点や習慣を温存し、それによって破滅につながる弱い環を作りつつ、敵に攻め寄せるすきを与えている人が大勢います。ゲーテがファウストを書いたとき、靈魂の敵の攻撃方法について、彼は靈感を受けてある真実を語ったと私は思います。年老いたファウストは若返りたいと願いました。そして変身を祈りました。しかしファウストの求めたものは不法であったため、主の答えがありませんでした。それでもファウストは執拗に祈り続けましたが、私たちが「しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさってください」と言

わずにこだわり続けるとき、悪魔は容易に返事をくれます。ファウストの場合がそうでした。悪魔はこう言いました。「私があなたにそれをしてあげよう。若くしてあげよう。若返ったあなたは乙女を求めよう。」そこで美しいマルガレーテの幻が示されます。

「だがそのためには、体が若返ったときその靈は私のものになると、契約をするのだ。」

悪魔が欲しがっているのは、体ではなく、不滅の靈です。彼は肉体をだしにして靈を捕らえようとします。体は靈をとりこにできるからです。しかし、靈も体を僕とし、その主人となることができません。

さて、その契約は成立しました。若者になったファウストは約束の乙女のことを覚えていて、ふたりは乙女を捜しに行きます。そして教会へ入って行く彼女の姿を見つめます。ファウストは駆け寄ってつかまえようとしますが、悪魔はそれを押しとどめて言います。「そう急ぐな。そのようにしてつかまえるのではない。」ここに真理があります。悪魔は人をそのようにしては捕らえられません。いきなり人をさらって来て、意志に反して縛りつけ、奴隷とすることはできないのです。生きとし生ける人に、「サタンよ、退け」と、キリストと同じように言う力が与えられているからです。サタンは、主から離れた通りすみやかにあなたから離れて行くでしょう。私たちが同意しない限り、ひとりたりともとりこにはできないのです。そこに悪魔の限界があります。悪魔は人を説得して抱き込まなければならないのです。

いきなり人をさらって来て、意志に反して縛りつけ、奴隷とすることはできないのです。生きとし生ける人に、「サタンよ、退け」と、キリストと同じように言う力が与えられているからです。



男でも女でも、瞬時に悪の深みには はまりません。少しずつ、ゆっくりと、 足を踏み入れていくのです。

マルガレーテについてもそうでした。悪魔は彼女を懐柔しなければなりません。ふたりはマルガレーテのことを研究し、弱点を捜しました。彼女は純潔で徳高く、すばらしい少女でしたが、弱点をひとつ持っていました。それは虚栄心でした。そこで彼らはその弱い環をねらいます。庭に宝石を置き、わきに鏡を添えました。マルガレーテはそれを見つけ、虚栄心に動かされて、宝石を着け、自分がどんなに美しいか鏡を見たいと思います。するとその機を逃さず、誘惑者が現われ、それは未来の恋人からの贈り物だと言います。マルガレーテは宝石が欲しいという気持ちに駆られます。

恋人同士が午後を共に過ごしている、庭から帰っておいでとマルガレーテを呼ぶ母親の声が聞こえてきますが、彼女は見つけたばかりの恋人を置き去りにしたくありません。するとまたもこの時とばかり、悪魔が現われて、これを母親の夕べの飲み物に入れれば母親はすぐに眠るから、恋人たちに邪魔は入らないと言って、ファウストの手に薬を握らせます。私は、母親の影響下から連れ出されて悲嘆や悩みにあう女性の話をいくつも聞いています。世界で一番安全な場所は母親に近い場所だということが、ただ忠告するだけでは女性たちに十分わかっていただけないのはどうしてなので

しょうか。

マルガレーテの母親は毒薬を飲んで眠りました。恋人たちは夜を共に過ごします。翌朝早く、兄のバレンチノが登場して、母親が死んでいるのを見つけます。それは死の眠り薬だったのです。そして家には他人が妹のマルガレーテといます。けんかが始まり、決闘になってバレンチノが殺されます。ようやくマルガレーテは事の次第を察し、自分の行ないの重大さを悟りました。母を殺し、兄を死に至らせ、そして自分は死よりも悪いことに、純潔を失ったのです。マルガレーテが髪をかきむしって泣いていると、悪魔が笑いながら登場します。彼はまたひとりの人間を手中に収めたのでした。マルガレーテの防備は固かったのですが、ひとつの弱点があり、敵はそこから城に入って城を攻め落としました。

このようにして、人知れぬ弱点や悪癖が、あなたの内部に通じる扉を敵の前に開き、敵はそこから入ってあなたを占領し、その主人となるのです。悪魔は中に入ってから、犠牲者を甘い言葉で安心させ、少しなら嘘をついてよい、少々盗め、小さな罪を犯せ、わずかに鞭打たれるだけだから心配はいらないとささやきます。

中に入るための扉を開けさせるのが、悪魔のひとつの手段です。皆さんに申しあげます。それは、現在でも悪魔が人々を捕ら

えようとするときの方法です。この教会に対して特に敵対する動きや組織がないときにも、この敵はぬかりなく目を覚ましています。彼は新しいやり方で男女を墮落させようとならっています。ねらわれない人間、攻撃をしかけられない人間はひとりもおらず、もしサタンが入口を見つけたならば、必ずやその人を捕らえようと試みることでしよう。

私が見たのは、そうした個人の試される時代が迫りつつあることでした。ですから、私たちが陣容を固めて自分を守るために、武装する彼らの勢力について、あるいは彼らの目的について知るとよいと思います。あらかじめ警告を受けたからには備えをなすべきです。皆さんに申し上げます。教会が受けた福音の原則の一つ一つは、そもそもが、敵からの攻撃に対して私たちが身をよろうためのものなのです。たとえば、知恵の言葉を守る人は自身を清く保って身をよろい、世の罪に汚されないことでしよう。

私たちの魂の敵が昔から用いてきて今も得意とする一番の手段は、霊の命に対する最悪の罪、すなわち放縦が行き着くところの不道徳に向かって、少しずつゆるやかに人々を誘い、そうして彼らを捕らえてしまうことです。どのような国も悪徳の時代を越えて生き延びたことがありませんし、将来もないでしょう。今、誘惑者は罪に目をつむれと人々に勧め、高い地位にある人たちでさえ、十戒の権威や力や活力を放棄して、性の不法でみだらな交わりをまったく罪ではないとしているように見受けられます。しかしそれは霊性と対立するゆゆしい

罪、人類と国家の生命を脅かす致命的な罪であると申しあげます。ある人々は言うでしょう。「ああ、確かに私には罪も弱点もあるだろうが、もう少したつて年を取れば克服もできよう。今はまず飲み食いなどして、それは明日に延ばすのだ。死ぬ前に悔い改めればいいのだから」と。

皆さんに申しあげたいと思います。死すべき肉体を持った現在を除いて、肉と悪魔とに打ち勝ち、征服することのできる時はありませんし、またこれからもないでしょう。一番良いのは若い時期です。私たちは習慣の影響力を引き合いに出し、罪人を悪い習慣の犠牲になったとして赦すことがよくありますが、良い習慣も悪い習慣と同様に、人の行為を統御するうえで、大きな力を持っていると申しあげたいのです。

人々が若い時期に、主に仕えること、良い習慣や徳高い心、正しい行ない、正直や誠実を培うことができたなら、どんなにかすばらしいことでしよう。それができれば、強さと力の時期に至ってその力の大部分を、青年時代の悪弊を正すことや、あるいはあるべきではないものの排除につき込む代わりに、「さらに壮麗な自分という城を築いていく」ことに使えるのです。男でも女でも、瞬時に悪の深みにははまりません。少しずつ、ゆっくりと、足を踏み入れていくのです。徳の道からそれで不道徳に至るまでの道が急速でないことは祝福です。

*バラード長老は1873年、ユタ州ローガンに生まれ、1919年1月7日使徒に聖任された。1939年に死去。

りよう ほう 両方のいいところ

お話し: ベティー・ルー・メル

トミー・ティパナは、3さいのときから毎年おじいちゃんのエタックといっしょに平原に行って、むかしのエスキモーの生活を学んだ。でも、トミーのお父さんは近代的なエスキモーで、がんばりょうな木の家に住んでいたし、雪上車を持っていた。ぜんぜんむかしの人のような生活なんかしていない。それなのに、おじいちゃんはむかしの人の生活を学ぶようにと言った。

トミーが10さいのとき、おじいちゃんは犬ぞりで旅をしようと言った。ある明け方のことだった。トミーはお父さんとお母さんに手をふって、犬ぞりのクマの毛皮の下

にもぐりこんだ。エタックは長いむちを鳴らして犬をかりたて、雪におわれたツンドラへと走りだした。

その日の夕方、エタックとトミーはそりを止めて、犬にトナカイの肉を食べさせた。それからエタックは雪の上をぼうでたたいて、雪のぐあいをたしかめた。「ここがいいよ。」トミーはゆびさして言った。

おじいちゃんもうなずいた。「うん、雪がたくさんつもって、かたくなっている。いいイグルー（エスキモーの家）ができるぞ。



よくわかるようになったなあ。」

トミーとユタックはかたい雪のブロックを切り出して、積み上げた。それから、ブロックのつぎ目やすき間に雪をつめこんだ。開いているのは、小さな入り口だけだった。火をおこすと、あたたかくて気持ちよかった。その次には、氷にあなをあけて魚をつった。食事をしながら、ユタックはニコニコしていた。トミーがたのもしくなってきたことが、うれしかったのだ。ユタックは言った。「エスキモーの生活を学ぶのはいいことだ。いまに；こんなことを知っている人間はいなくなる。新しい生活はよくない。」

「お父さんだって新しい生活をし

ているよ。どうして新しい生活が悪いの。」

「お父さんやお母さんは、店に行つて食べ物や服を買ってくるだろう。魚のつり方も、かりの仕方、かわのなめし方や服のぬい方もわすれてしまったんだ。犬ぞりも持っていない。そのかわりに雪上車に乗っている。使い方も知っていれば、必要な物はみんなイグルーの外にあるんだよ。」

ユタックがねむってしまったので、トミーはクマの毛皮にくるまって、じっと火を見つめていた。「むかしの生活と今の生活と、どっちがいいんだろう。」トミーは考えた。トミーはどっちもすきだった。

朝早くトミーとユタックは大急ぎで食事をし、身じたくをした。もう火が消えかかっていたからだった。

トミーは、すべり止め
にトナカイの皮を



なが うえ
長くつの上からぐるぐるまきつけた。
それから^{けがわ}毛皮の上着^{うわぎ}についたぼうし
を深くかぶって、まぶしい銀世界^{ぎんせかい}には
はい出した。こおったクジラのあぶ
ら肉^{にく}を投^なげてやると、犬^{いぬ}たちはぶる
ぶると体^{からだ}をふるわせて雪^{ゆき}をはらい
落^おとし、ほえながら、先^{さき}をあらそっ
て肉^{にく}にむしゃぶりついた。犬^{いぬ}たちが
えさを食^たべおわると、トミーは犬^{いぬ}た
ちをそりにつないでおじいちゃんを
まった。でも、ユタックはなかなか
イグルーから出^でてこなかった。「おじ
いちゃーん。」トミーは入口^{いりぐち}にしゃ
がんでよんだ。

「トミー、来^きてくれ。」おじいちゃ
んの弱^{よわ}々しい声^{こえ}がした。イグルーの
中^{なか}に入^{はい}ると、おじいちゃんがかべに
よりかかって、むねをさすっていた。

「おじいちゃん、病^{びょう}気^きなの。」

ユタックは近^{ちか}くに来^くるように言^いっ
た。「わしをここにおいて行^いくんだ。
それが病人^{びょうにん}をあつかう、むかしのほ
うほうなんだよ。」

「そんなことできないよ、ぼくの
おじいちゃんじゃないか。」

「いいんだよ。」おじいちゃんはゆ
っくりと頭^{あたま}をふりながら言^いった。
「言^いうとおりにしなさい、わしをお

いて行^いくんだ。犬^{いぬ}ぞりに乗^のってお父^{とう}
さんやお母^{かあ}さんのところ^{ところ}に帰^{かえ}りなさい。
しかし、むかしの生活^{せいかつ}をわすれ
ちゃいかんぞ。」

「ぼく、行^いかないよ、まだ知^しらな
いことがいっぱいあるんだもの。お
じいちゃんのほかに、だれも教^{おし}え
てくれないんだもの。」

トミーは外^{そと}にとび出^だすと、そりか
ら大^{おお}きなクジラのほねをとってきた。
「ほら、これに乗^のって。」トミーはユ
タックをクジラのほねに乗^のせると、
ひっばって外^{そと}に出^でた。ユタックがゆ
っくりとそりに乗^のると、トミーはク
マの毛^け皮^{かわ}をかけてあげた。それから
持^もち物^{もの}を少^{すこ}しだけそりにつみ、家^{いえ}の
方^{ほう}に犬^{いぬ}ぞりを向^むけた。

犬^{いぬ}は手^てづなを持^もっているのがユタ
ックではないと知^しって、そりを引^ひく
のをいやがった。トミーは、前^{まえ}にお
じいちゃんがやっていたように、重^{おも}
いむちを持^もち上^あげて「行^いけっ！」と
さげんだ。むちの音^{おと}がいてついた朝^{あさ}
の空^{くう}気^きの中^{なか}にひびきわたり、犬^{いぬ}はも
う一度^{いちど}うなり声^{こえ}をあげると、今^{こん}度は
そりを引^ひき始^{はじ}めた。トミーは、手^て
づなを取^とるのははじめてだったが、も
うおじいちゃんからたくさんのこと

を学んでいた。

こおりついたツンドラの上を、そりはどンドン走った。おじいちゃんは、何も言ってくれなかった。でも、トミーはおじいちゃんの言ったことをみんなおぼえていた。その夜おそく、そりは家に着いた。次の日の朝、ユタックは病院の白いシーツをしいたベッドの上で目をさました。まだにはカーテンがかかっている、かんごふさんがユタックの顔をのぞきこんでいた。

「おまごさんが助けてくれたんですよ、ティパナさん。おあいになりたいですか。」

ユタックはうなずいた。トミーと、トミーのお父さんとお母さんが入ってきた。トミーはおじいちゃんの上にかがんで、おじいちゃんをだきしめた。「ありがとう、おじいちゃん。」トミーはそっとささやいた。

「どうして、ありがとうなんだ、

わしを助けてくれたのに。」ユタックはげげんそうに言った。

トミーはにっこりとして言った。「むかしの生活を教えてくれたからだよ。もし教えてくれなかったら、おじいちゃんをここまで運んでこれなかったもの。おじいちゃんを助けてくれる新しい病院にね。」

トミーのお父さんは、顔をしかめて言った。「おじいちゃん、むかしの生活なんかやめてくださいよ、新しい生活の方がずっといいし安全なんだから。」

トミーは、お父さんとおじいちゃんが言い合っているのを、くすくすわらいながら聞いていた。「どうして、ぼくみたいに両方ともいいってことがわからないんだろう。ぼくは両方のいいところをとった生活をしようっと。だって両方ともすきなんだもん。」



ノアとはこぶね

「^{せいてん}聖典^{ものかり}からの物語」より

ノアの時代^{じだい}の人々^{ひとびと}は、みんな悪^{わる}い人^{ひと}でした。心^{こころ}はすさんでいて、悪^{わる}いことを考え、おそろしいことをたくさんしていました。

でも、ノアは正しい^{ただ}若者^{わかもの}でした。ノアはおじいさんのメトセラ^{しん}から神^{けん}権^{けん}を受け、神^{かみさま}様^{さま}から福音^{ふくいん}を教^{おし}えるようにめされていました。神^{かみさま}様^{さま}はおっしゃいました。「人々^{ひとびと}がくいあらためなければ、こう水^{すい}を起^おこそう。」人^{ひと}はまちがっていると言^いわれたくなしものです。ノアは、そのことを知^しっていましたが、神^{かみさま}様^{さま}の言^{こと}葉^はにしたがって、くいあらためをさげびました。人々^{ひとびと}は、ノアをあざけりわらい、くいあらためようとせず、こう水^{すい}でほろぼされてしまうことをしんじようともしませんでした。

ノアは、人々^{ひとびと}がほろぼされるのをのぞんではいませんでした。そのよ^{ひとびと}うな人々^{なか}の中には、大^{だい}すきな友^{とも}だち

や親^{しん}せきも大^{おお}ぜいたので、ノアはいつも神^{かみさま}様^{さま}の教^{おし}えについ^{はな}て話^{はな}してました。「聞^きいてください、わたし^{わたし}の言^{こと}を心^{こころ}にとめてください。神^{かみさま}様^{さま}をしんじて、つみをくいあらため、先^{せん}ぞちのようにイエス・キリス^{キリス}トのみ名^なによって、バプテスマ^{バプテスマ}を受け^うてください。」

ノアは100年^{ねん}ものあいだ、くいあらためなさい、くいあらためなさい、と言^いいつづけました。しかし、人々^{ひとびと}はノアをばかにするばかりで、しんじようともしませんでした。人々^{ひとびと}は、前^{まえ}よりもっと悪^{わる}くなりました。そのころは地上^{ちじょう}に巨^{きょ}人^{じん}がいて、ノアの命^{いのち}をつけねらっていましたが、神^{かみさま}様^{さま}が守^{まも}ってくださったので、ノアはが^ういを受け^うけませんでした。

とうとう正^{ただ}しい人^{ひと}は、地上^{ちじょう}に8人^{にん}しかいなくなってしまうました。ノアとその息^{むすこ}子^こたち（セム、ハム、ヤ

ペテ)、そしてそのつまたちでした。

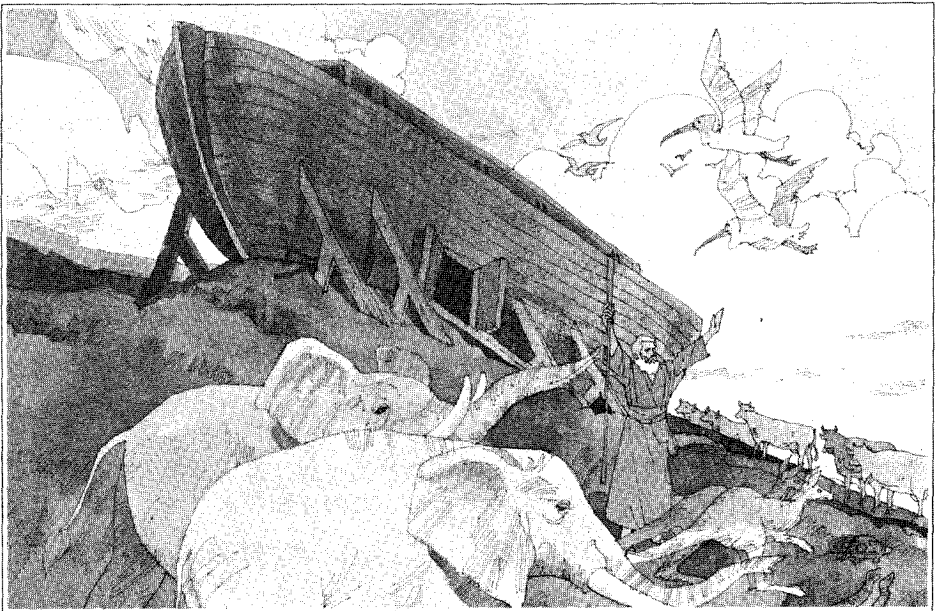
神様はノアに言われました。「すべて肉あるものを地からぬぐいさつてしまおう。」

人々がくいあらためられるよう、神様は何年もまっておられました。が、くいあらための時はすぎてしまいました。

神様はノアに言われました。「いとすぎの木ではこぶねを作り、その中に部屋を作りなさい。はこぶねの長さは300キュビト、はばは50キュビト、高さは30キュビトにしなさい。

ふねは3がいでてにして、内がわと外がわにアスファルトをぬり、水が入らないようにしなさい。」

そんなに大きなふねを作るのは大へんな仕事でしたが、ノアはできないとは思いませんでした。ノアと息子たちは、神様のおっしゃる通りにとすぎの木を組み始めました。ふねを作るには長い年月がかかりました。ノアの友だちや近所の人たちは、かわいた地面の上にそんなに大きなふねを作ってしまうのだと言って、わらいました。しかし、ノアは悪い



ひとびと
人々にあざけられても、くじけませ
んでした。ノアは神様を心からしん
じていて、考えることといえば、神
様のみこころにしたがうことだけで
した。

ついに、はこぶねができあがりま
した。長さ171メートル、はば29メ
ートル、高さ17メートルです。神様
はノアのことを、およろこびになり
ました。神様はノアに、そのころの
おきてで、きよいものとされている
鳥と動物をオスとメス7つずつ、き
よくないものとされている動物をオ
スとメスふたつずつ、はこぶねに入
れるようにとおっしゃいました。

神様はノアに、7日すると雨がふ
り始めるとおっしゃいました。ノア
はおくれないように、動物や鳥や虫
をはこぶねの中に入れました。ノア
は神様の言いつけにしたがって、家
族と動物たちのために十分な食物と
水を用意しました。

神様がおっしゃった通り、7日後
に雨がふり始めました。ノアとその
家族がふねの中に入ると、神様がふ
ねの戸をおしめになり、こう水が来
ても安全なようになさいました。

40日40夜、雨はふりつづき、水が
地をおおい、はこぶねはうきあがり
ました。まもなく水は深くなり、高
い山も水の下にしずみました。肉が
あり、地上を動きまわっていたもの
はみな、鳥も、家畜も、野のけもの
も、地をはうものも、人間も死んで
しまいました。

やがて雨はやみましたが、150日の
あいだ水はひきませんでした。150
日して神様が地の上に風をふかせら
れたので、水がひき始めました。

はこぶねは、アララテ山の上にと
どまりました。でも、ノアとその家
族はそれから半年もはこぶねの中
にいました。40日がたったとき、ノア
ははこぶねのまどを開け、ハトを放
ちました。まだ地面が水でおおわれ
ていたらしく、ハトはすを作る場所
を見つめることができず、はこぶね
にもどってきました。また7日して、
ノアはもう一度ハトを放ちました。
すると今度はオリーブの葉をくわえ
てきました。こうして、ノアは水が
ひいたのを知りました。また7日し
て、もう一度ハトを放ってみました。
しかし、今度は帰ってきませんでし



た。きつと、きよめられた地上に住む場所を見つけたのでしょ

ノアとその家族はほぼ1年間、はこぶねの中ですごし、1年後にやとふねのおおいをとりのぞき、地面を見たのです。2か月の月日がたつて地面がかわいたとき、神様はおっしゃいました。「家族や動物たちを外に出しなさい。」

ノアは感しゃの気持ちでいっぱいになり、神様のために祭だんを作り

ました。ノアは自分が本当にしゆくふくされていたことを知り、感しゃをあらわすために、きよい動物1ぴきと鳥を1わ、いけにえとしてささげました。ノアは自分と家族がすくわれ、命をながらえることができたことを、神様のみこころにかなったほうほうで感しゃしたのでした。おいのりの中でノアは神様に、「もうけっして、こう水で地をほろぼさないでください」とおねがいしました。神様はノアのいのりを聞いてくださり、もうけっして、こう水で地をほろぼさない、とやくそくしてくださいました。そのときから、やくそくのしるしとして、空ににじがかかるようになったのです。

(この物語は、モーセ8章、創世6-9章に書かれています)

1. キュビト：1キュビトは、やく46-55センチメートル
2. きよい動物：ひづめがわれていて、反すうする動物。たとえば、牛はきよい動物ですが、ウシとかネコはきよい動物ではありません。

お子さま クッキング

マジックドレッシングサラダ

レタス……………1こ
キュウリ……………3ぼん
たまご……………3こ
エバミルク……………1カップ
す……………1/3カップ
ケチャップ……………1/2カップ
カッターチーズ…おおさじ3ばい
きざんだピクルス
……………おおさじ1½ばい
おろしたたまねぎ……こさじ1ばい

1. レタスとキュウリをよくあらい、しんをとり、みずけをきってラップかぬのにくるんでれいぞうこでひやします。
2. たまごをゆでて、わぎりにします。
3. のこりのざいりょうをまぜあわせてドレッシングをつくり、れいぞうこでひやします。

4. レタスとキュウリをたべやすいおおきさにきっておさらにもりつけ、ゆでたまごをかざります。ドレッシングをかけてめしあがれ。

かんたんスパゲティ

スパゲティ……………300グラム
ふたのひきにく……………300グラム
トマトジュース……………3かん
スパゲティソースミックス…1はこ
こなチーズ……………すこし

1. おなべでひきにくをいためます。
2. トマトジュースとソースミックスをくわえ、ふたをしてよわびで30ぶんかんひにかけます。
3. スパゲティをゆでます。
4. スパゲティのみずけをきってうつわにもりソースとこなチーズをかけてできあがり。

チョコレートピーナッツサンデー
チョコレートシロップ……1/2カップ
つぶいりピーナッツバター
……………1/4カップ
バニラアイスクリーム
……………500ミリリットル

1. ちいさいおなべでチョコレートシロップとピーナッツバターをまぜて、ひにかけます。

2. バニラアイスクリームにあたたかいままの1のソースをかけてめしあがれ。



こまったこと

よるねるときにはかおをあらって
はをみがきます。
それからかみもときます。

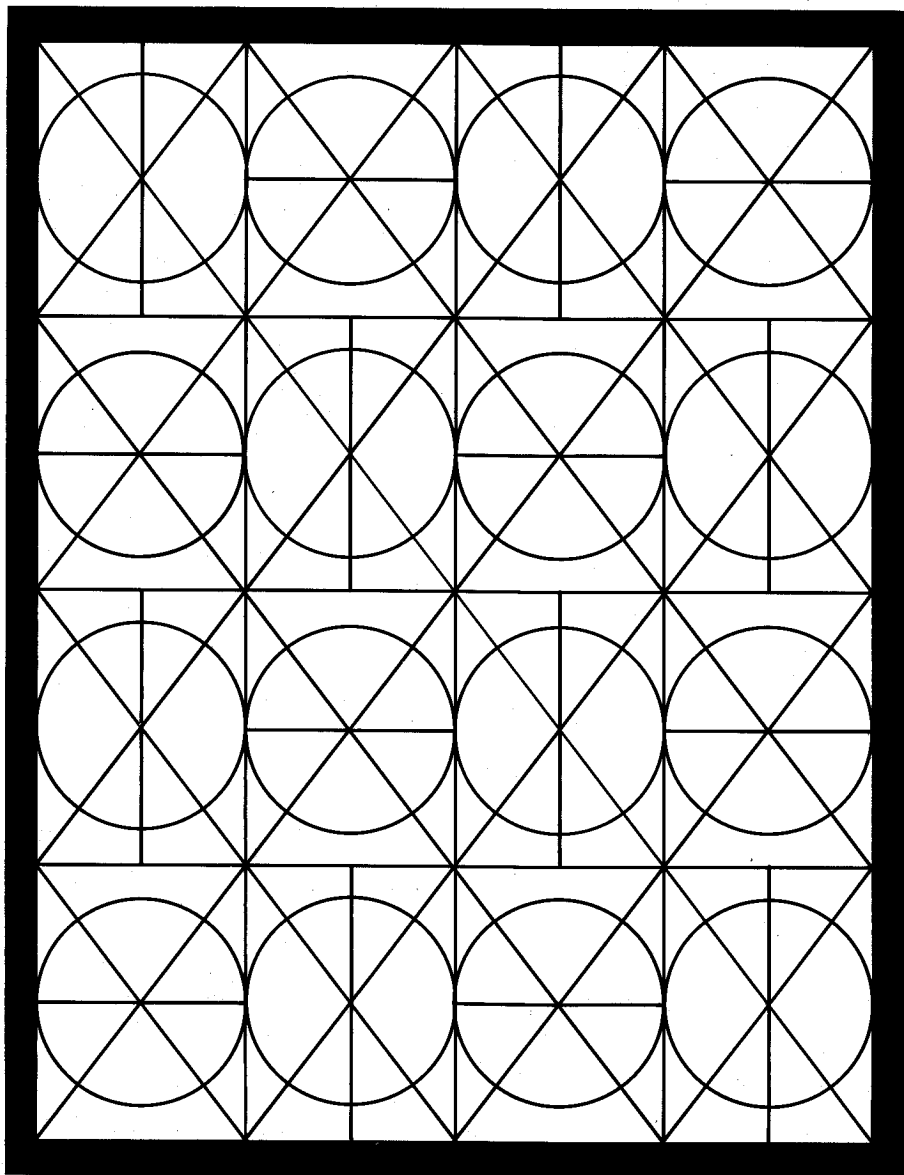
あさ、はやくとびおきて
かおをあらってはをみがき
がっこうへとでかけます。

でもひとつだけこまったことは
どうしてあたまがクシャクシャに
なるの
ただねているだけなのに



いたずらさんかく

さんかくがいくつあるかがしてください。



家庭で 読書意欲を 養うには

この頃の子供たちはテレビを見過ぎだとは思いませんか。それでは、14歳の僕が、その解決法をご紹介します。それは、読書です。僕の家では、読書が最高の楽しみのひとつになっています。

4年前、僕の両親はついにテレビを買ってくれました。そこで僕たちは、土曜日には朝の6時半に起きて、漫画を見始め、家族の祈りを捧げる10時まで、テレビの前に釘づけでした。それから朝食を食べるのですが、テレビを見る以外、土曜日にはこれといってすることがありませんでした。

そのうち、テレビが原因でいろいろな問題が起こってきました。テレビの怪獣番組に夢中になっている僕たちを見かねた母は、ある日、不要品交換プログラムを呼びかけていた地方のラジオ局に電話をかけ、テレビを売ってしまったのです。

僕たちは不平や泣き事を言いましたが、両親はがんとして僕たちの言うことをはねつけました。僕たちは、テレビに代わるものを探さなければなりませんでした。

そこで蔵書がたくさんあることに気づいた僕たちは、本を読み始めることにしました。僕たちは山のようにあった本を何度も何度も読み返すほどに読書にふけるようになり、やがて、近くの市立図書館にまで足を運ぶようになりました。

驚いたことに、図書館にはおもしろい本がた

くさんあり、しかも無料で読めるとあって、僕たちは夢中になりました。退屈している暇もありませんでした。

やがて、本を読むことが習慣になりました。今では、少しでも本を読まないと思えないほどになりました。

読書は、いろいろな効果を生み出します。たとえば、弟や妹が幼稚園に通い始めた頃のことですが、読み書きがほかの子供よりずっと進んでいるのでびっくりされたそうです。

テレビがある家庭では、テレビの上に常に3、4冊本を置いておくようにしてはどうでしょうか。本は、僕たちの将来の鍵を握るものではないかと思います。(ノースダコタ州ワープトン、ピーター・クルッケンバーク)

●読書休暇

家庭で読書に対する関心を高めるための方法をご紹介します。

- ホーム・ライブラリーを作る。また小さい子供たちのために個別の蔵書コーナーを設ける。
- 折にふれ、子供にプレゼントとして本を贈る。
- 楽しんで読書できるようにする。休みを利用して本を読んだり、旅行の合間に読むのもおもしろい。
- 読書は楽しみながらするものであるという模範を父親が示す。(アリソナ州メサ、バーバラ・クリスチャンセン)

●聖典にある話を読む

私の家では、3人の息子がベッドに入るとすぐ、私と夫が交替で、子供用の物語を少しずつ読んで聞かせています。マーク・トウェインの「トム・ソーヤーの冒険」は中でも大のお気に入りのようでした。日曜日には、聖典や

聖典を元にしたお話を読んでやります。教会からは、子供向けのよいお話がいろいろ出版されています。

私たちの本箱は、特に子供用の本で一杯です。両親にも答えられないものもありますので、子供向けの百科事典や辞書を置き、子供が自分で答えを探せるようにしてあります。家族そろって読書する時間は、私たちにとってとても素晴らしいひとときになっています。(カリフォルニア州ウォールナット・クリーク、ピッキー・クリスチャンセン・ジョーンズ)

●家族で勉強

私たち夫婦は、子供の成長を促すために、子供たちにピアノやダンス、水泳、体操などのほか、読書の仕方も教えています。家では子供が3歳から3歳半になると、毎日5分間文字の見分け方と発音の仕方を教えます。このようにすると、4歳までには簡単な言葉を読むことができるようになります。

夜、子供たちは、テレビを見る代わりに本を読んで眠りにつきます。5歳と7歳の息子は、家庭の夕べでとても上手にモルモン経を読みます。また3歳の娘は、看板などに書かれている言葉が読めたときにはとても喜びます。こうして、家族全員が読書力を伸ばすことに意欲を示し、素晴らしい成果を上げています。(ユタ州ブラフデール、ブリントン・ウェブ)

●家族で図書館通い

我が家では、子供が小さい頃から公立図書館に足を向けるようになり、それがやがて習慣になりました。そうして定期的に図書館に行くことが、私たち親子の楽しみになったんです。子供たちは、児童文学書に親しむようになったばかりでなく、図書館の上手な利用法を

覚えてくれました。

その子供たちも今は成人して、それぞれ独立しましたが、私たち夫婦は今も定期的に図書館に足を運び、老後の楽しみのひとつとしております。(ミネソタ州イースト・グラント・フォークス、カレン・A・アンダーソン)

●手ごろな本棚作り

安い板やブロックなどを利用して、本棚を作ってみてはいかがでしょうか。できれば、子供部屋に本棚を作り、子供に本を自己管理させるようにするのはどうでしょう。古本屋、学校や図書館などで行なう古本市、また友人から譲り受ける本など、本を安く手に入れられる方法を考えてください。私の家には、3部屋に合計4つの本棚がありますが、そこに収められている本の90パーセントは古本です。

私たちは、6人いる子供のうち4人に、就学前に読書を教えました。その子供たちの読解力は、同年齢の子供たちをはるかにしのいでいます。読書は理解力を高めます。したがって、読書のよくてできる子供は、学校の成績もさることながら、生活上のいろいろな面で成功するようになるものです。(コロラド州ペンローズ、シェリー・シンマーマン)

〈原稿を募集しています〉

●ローカルページに各地の身近な話題や行事、日々の信仰生活から得ている証など、原稿をお送りください。11月号掲載分の締切は9月7日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。☎03-440-2351(代)

世界13の地域を 管理する地域会長会 新たに組織される



大 管長会は、アメリカとカナダの7つの地域を含む世界13の地域を管理する地域会長会が組織される旨を発表した。

この教会の地域管理形態の変更は、7月1日から実地された。

会長とふたりの副会長から成る地域会長会は、七十人第一定員会の会員によって構成され、彼らはその召された地域内の教会を強め、正しく運営していくことにおいて、大管長会と十二使徒定員会に報告をすることになっている。

ここ数年来、ソルトレーク在住で時折任地に赴く形で七十人第一定員会の会員がいくつかの地域の地域代表管理役員として召されているが、地域会長会はこの地域代表管理役員に取って替わるものである。

当分の間、ヨーロッパ・イギリス・アフリカ地域の会長会役員はドイツのフランクフルトに、オーストラリア・ニュージーランド・太平洋諸島の役員はオーストラリアのシドニーに、アルゼンチン・チリ・ウルグアイ・パラグアイの役員はアルゼンチンのブエノスアイレスに滞在することになるが、そのほかの役員は今のところ引き続きソルトレーク・シティーの教会本部でその召しを果たす予定である。

大管長会によれば、この新しい管理方法は、教会が全世界的な発展を遂げるにあたって教会員一人一人の必要がより一層満たされるよう、必要に応じて評価、改善されていくことになっ

●アジア地域を管理する地域会長会（左から第一副会長のジャック・H・ゴズリンド・ジュニア長老、会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老、第二副会長のロバート・B・ハーバートソン長老）

ている。

末日聖徒イエス・キリスト教会には、世界中の人々にイエス・キリストの福音を宣べ伝える、福音の儀式を受けられるよう備えることにより聖徒たちを完き者とする、身代わりの儀式により死者を贖うという、神から与えられた神聖で常に変わることはない使命がある。ゴードン・B・ヒンクレー第二副管長が強調するのは、教会の発展に伴い、教会がその使命を果たすうえで運営の柔軟性を求められているということである。

この地域会長会の召しは、教会の通常の管理形態に則したものである。この組織は、管理に活力を、決断に知恵を、そして教会発展というチャレンジに対して柔軟な対応をもたらすものである。またヒンクレー副管長は、この召しにはほかの場合と同じように、一定の任期のあることをつけ加えている。

地域は以下の通りである。

——ヨーロッパ地域（ヨーロッパ、イギリス、アフリカ）ジョセフ・B・ワースリン長老、デレク・A・カスパート長老、ラッセル・C・テイラー長老。

——太平洋地域（オーストラリア、ニュージーランド、太平洋諸島、ハワイ）ロバート・L・



シンプソン長老、デビア・ハリス長老、フィリップ・T・ソントック長老。

——**アジア地域**（日本、フィリピン、韓国、台湾、香港、東南アジア、タイ、インド、インドネシア）ウィリアム・R・ブラッドフォード長老、ジャック・H・ゴーズリンド・ジュニア長老、ロバート・B・ハーバートソン長老。

——**メキシコ・中央アメリカ地域**（メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス、コスタリカ、パナマ、エルサルバドル、ニカラグア）ジーン・R・クック長老、テディー・E・ブルーアートン長老、アンゲル・アブレア長老。

——**南アメリカ北部地域**（ブラジル、ベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア）チャールズ・A・ディディエ長老、ロバート・E・ウエルズ長老、F・バートン・ハワード長老。

——**南アメリカ南部地域**（アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、パラグアイ）A・セオドア・タトル長老、ジェイコブ・ディエガー長老、スベンサー・H・オズボン長老。

——**北アメリカ北東部地域**（合衆国北東部、カナダ東部、中西部、中部、中北部）レックス・C・リープ・シニア長老、W・ Grant・バンガター長老、ほか1名は後日発表。

——**北アメリカ南東部地域**（合衆国中南部、カリブ諸島、合衆国南東部）ボーン・J・フェザーストーン長老、ロナルド・E・ポールマン長老、ほか1名は後日発表。

——**北アメリカ北西部地域**（合衆国北部平原地帯、合衆国北西部、アイダホ、ブリティッシュ・コロンビア、アルバータ）ローレン・C・ダン長老、F・エンツィオ・ブッシュェ長老、ジョージ・P・リー長老。

——**ソルトレーク・シティー北部地域**（ユタ北部、オグデン、ソルトレーク・シティー）

ヒュー・W・ピノック長老、菊地良彦長老、ほか1名は後日発表。

——**ソルトレーク・シティー南部地域**（グレインジャー、マリー、プロボ）ジェームズ・M・パラモア長老、ジョン・H・グローバーク長老、ほか1名は後日発表。

——**北アメリカ南西部地域**（合衆国南部平原地帯、アリゾナ、ネバダ、ユタ南部）ロバート・D・ヘイルズ長老、レックス・D・ピネガー長老、ハートマン・レクター・ジュニア長老。

——**北アメリカ西部**（南カリフォルニア、北カリフォルニア）ロバート・L・バックマン長老、ポール・H・ダン長老、ジョン・K・カーマック長老。



ソウダラ ソウダラ スカリアン。スラムマット シアン。アパカパール（兄弟姉妹の皆さん、ごきげんいかがですか）

私たち家族は、赤道直下南国インドネシアに日本人学校の政府派遣教員として約1年半前に赴任してまいりました。

インドネシアは面積が日本の5.5倍、人口は1億5千万人。東西の長さはアメリカ大陸が

ローカルページ

すっぱり入ります。13,677の島々から成り、300にもおよぶ種族が異なった文化的背景をもって生活しています。しかし、「ビネガ・トゥンガレイカ」（多様性の中の統一）を合い言葉に国家がまとめられています。人口の87パーセントがイスラム教、2パーセントがヒンズー教、7パーセントがキリスト教など、宗教の国インドネシアと言っても過言ではありません。人々はたいへん謙遜で信仰深く、町のいたる所に回教寺院があります。日に5回聖地メッカに向かって祈りが捧げられ、その祈りは町中にひびきわたり、すみずみまで敬虔の念に染まります。

回教国インドネシアでの末日聖徒イエス・キリスト教会の教会員は、全国で約2,000人。現在全国に14の支部がありますが、外人宣教師、宗教学者の入国は禁止されているので、この地に伝道本部を持つことはできません。したがって伝道本部はシンガポールにあり、シンガポール、インドネシア、インド、スリランカ、マレーシアの5つの国を管理しています。

私たち家族の住むバンドンの町は、インドネシアで初めて伝道が開始された所です。バンドンの人口は150万人、インドネシア第3の国際

都市です。また、故スカルノ大統領出身の名門校、バンドン工科大学をはじめとする多くの国立、私立大学のキャンパスのある文化学園都市でもあります。しかしこの町の名前が世界に知られたのは1955年に開催されたアジア・アフリカ会議（バンドン会議）でしょう。

私はインドネシアでただひとりの外人の支部長として、今年の4月1日、バンドン支部の支部長に任命されました。しかし私のインドネシア語はまだ日常会話程度で、レッスンはおろか、お祈りすらインドネシア語では無理でした。そんな状態で支部長という責任が果たせるか不安でしたが、必ず神様は前もってこの務めを果たすための道を備えてくださり、助けてくださることを知っていましたので、この責任を受けることにしました。

支部長に召されたその日に聖餐会でお話をしなければならず、記憶にあるありったけの単語を並べてお話をしました。こんな私を会員の皆さんが受け入れてくれるのかと思っていましたが、副支部長のスマルノ兄弟とバンバンヒダリヨノ兄弟が私の手となり口となって助けてくださいました。また、書記で英語の堪能な帰還宣



●(写真左)バンドン支部長会。中央が平野英雄支部長●(右)バンドン支部の会員たち。前列右側が平野姉妹、前列中央の両端が平野家の子供たち

教師のシアオ兄弟が私の言わんとしていることを訳してくださいました。それに彼は、インドネシア語のレッスンのため毎週1回私の家に訪問してくださいたり、いつでも、どこでも時間さえあれば、レッスンをしてくださいました。支部長としての面接や相談はすべてインドネシア語ですので、私のインドネシア語もこの3カ月でかなり進歩したようです。

現在、バンドン支部の問題点は、指導者が養成されていないことです。支部長に召されたその日、「支部長さん、来週から聖餐式のパンを4きれ持ってきてください」と言われました。また「月間会計レポートは支部長さんが書くことになっています」という調子なのです。要するに、今まですべて支部長がひとりで教会を管理してきたのです。

もちろん補助組織はありますが、形式こそ日本と同じでもほとんど機能していません。日曜学校の教師が活動しているだけなのです。

このように外国からの指導のないままに活動が進められ、どうやって運営しているのか目で見ることができず、指導者が育っていないのが一番の問題です。さらに、支部予算の問題もあります。貧富の差の激しいこの国では、人々の生活費は低く、ホームティーチングさえも思うようにできません。教会へ1時間かけて歩いて来るのはあたりまえなのです。求道者の多くは神を求めるのではなく、お金を求めて教会に集まってきます。毎週日曜日になるとこのような人々と面接をしなくてはなりません。伝道活動もチラシの配布や街頭伝道、戸別訪問は法律で禁止されており、求道者を見つけるのもなかなか困難です。

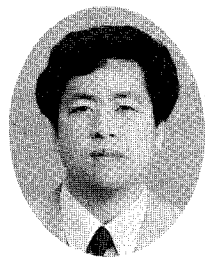
そんな苦勞をしながらも、会員の皆さんはとても明るく、謙遜です。また信仰が深く、神様のために生きようという姿勢があります。むず

かしい理論をふりかざしたり、物質的なものに執着したりせず、若者たちは証が強くなると何も考えずに伝道に出ます。

これからもいろいろな難問をたくさんかかえて支部の管理をしていくわけですが、神様の助けを借りなければ本当にこの責任を果たすことはできません。ホームティーチング、長老定員会の充実など、日本で身につけたことを少しずつ実行していこうと思っています。そして会員の皆さんと手に手を取ってみ国の建設のために全力を尽くしたいと決意しています。

かつて日本の人々がアメリカの宣教師にお世話になったように、経済的にも豊かになり祝福されている日本の会員の皆さん、今こそ、アジアの同胞に目を向けて、いろいろな形で愛を示すときではないでしょうか。(ひらの・ひでお元町田ステーキ部厚木支部支部長)

「汝らもしわが命令を守らば地に栄ゆべし」



東京東ステーキ部
小岩ワード部

高瀬 大地

「災」難は、ひとりでは決してやって来ない。必ず仲間と一緒にやって来る。」5年前の我が家は、まさにひどい貧乏神と疫病神にでも取りつかれたかのようでした。

重度の脳性マヒの娘だけで十分のはずなのに、妻は病氣、母は腰骨を折って歩くのがやっとという状態でした。高齢だった祖母が寝たきりであったため、母は自分の腰の痛さにかまわず、毎日毎日祖母のしもの世話をし、また妻の看病をしました。さらに悪いことに私は失業中の身でした。

そんな中であって、私をいつも支えてくれたのは、「主は、主を愛する者を決して見捨てることはない。たとえどんな事があっても」という強い確信と、「汝らもし神の命令を守らば地に栄ゆべし」（モーサヤ2：22）という聖句でした。

6月の初め、そのような状態の中で長老定員会会長の召しを受けました。何かの間違ひではないかと自分の耳を疑いました。しかし、断食と祈りによる答えは確かにそれが主からの召しであり、家族の祝福の始まりであることを、私にしっかりと教えてくれたのです。

それから数日して、明日面接に来るようにと、履歴書を提出していたB銀行から電話がありました。すぐ断食と祈りに入り、翌日の面接に備えました。次の日、銀行に行くと、経理部長の補佐ということで面接を受けました。とても不思議に思いました。なぜなら、B銀行へは外国部長の補佐の職責を希望して履歴書を送っていたからです。ともかく面接を終えて帰るとき、「あっ、私はこの銀行に入るな」と強い靈感を受けました。家に着いてから、妻に「主は私たちのためにB銀行を準備してくれた」と伝えました。しかし銀行からの返事は何もありませんでした。

その後の3カ月間に、私は3度、B銀行に面接に行きました。経理部長、副支店長、そして新旧交代のときだったので、ふたりの支店長から面接を受けました。そして驚いたことに、最後の面接が終わった翌日、銀行から電話があり、

正式にこう伝えられました。「あなたは最後のふたりまで残ったのですが、結局、残念ですが採用になりませんでした。」そばでそれを聞いていた妻は、涙を流し、非常に残念がりました。「主は最後になって私たちを見捨てられた……」という思いが瞬時に頭をかすめました。しかし私は前もって断食と祈りによりB銀行に入るという確信を得ていましたので、妻に「私はB銀行に入れるから心配しないでもいいよ。神様は、決して私たちを見捨てるようなことはされないから」と言って妻を慰めました。私の言うことを聞く気力もないほど失望していたのです。「はっきりと副支店長から断わられて、どうして入社できるの……」と。

そんなことがあって1週間ほどして、またB銀行から電話がありました。「経理部長の補佐ということではだめでしたが、今、外国部長の補佐なら席が空いているので、すぐ銀行に来てほしいのですが。」

奇跡が起こったのです。私はB銀行に職を得たのです。これには妻もびっくりしてしまいました。

入社後、親しくなったある方から私の入社に至る経過を聞く機会がありました。当初外国部長の補佐を希望して履歴書を提出したはずなのに経理部長の補佐として面接を受け、最終的に当初の希望通り外国部長の補佐として入社するようになったいきさつを尋ねてみました。彼は、こう説明してくれました。「最初銀行で外国部長の補佐が必要になったとき、たくさんの履歴書が送られてきたが、結局該当者なしということになり、そのまま全部ファイルに整理されてしまった。次に銀行で経理部長の補佐が必要となり、公募したが、何かしら先に該当者なしとしてファイルした外国部長の補佐で集まった履歴書をもう一度調べるようにと、理由もわからない

いままに促され、それらを一枚一枚丹念に調べて、結局数ある中から一枚だけ取り出した。それが君の履歴書だった。それは君がモルモンだからだよ。」彼はこう言ったのです。以前と同じ職場に末日聖徒の方がいてよき模範を示してくださっていたことが幸いしたのです。彼の説明を聞いているうちに、主を愛し、誠実に、また忠実に従っていくこうとしている者に与えてくださった大きな祝福に感謝せずにはられませんでした。

あのときから5年もたっていますが、私はいつも同じ確信を持ち続けています。「主は主を愛する者を決して見捨ててくれることはない。たとえどんなことがあっても……」

最後に、私の好きな詩を掲げ私の証といたします。

足 跡

ある夜、男は夢を見た。
主とふたりで、海辺を歩いている夢だった。
空には人生の様々な出来事が、まるで走馬灯のように、ひとつ、またひとつと浮かんで消えていった。
そして、そのたびごとに、砂の上には、ふたつ

の足跡がついていた。

——ひとつは自分の、そしてすぐそばには、主の足跡が並んでいた。

やがて最後の出来事がくりひろげられた。

男は、砂浜についた足跡を振り返って見た。

足跡は、ずっと続いていた。しかし、いたる所で足跡がひとつになっている。しかもよりによってそれは、人生の中で、絶望と悲嘆に明け暮れていたときなのだ。

男にはわからなかった。そこで主にこう尋ねた。

「主よ、あなたに従うと決心したとき、あなたはどんなことがあっても、いつも私と一緒に歩いてくれるとおっしゃいました。でも、私が一番困っていたときに限って、足跡はひとつしかありません。私にはわからない。私が心からあなたを求めていたときに、主よ、あなたはなぜ私を捨てて行ってしまわれたのですか？」

主は答えられた。

「我が子よ。かけがえのない私の子よ。愛するお前を私は決して見捨てはしない。お前が試練にあつて苦しんでいたときのあのたったひとつの足跡、それはお前を背負って歩いた私の足跡なのだから……。」「足跡」作者不明（たかせ・ひろただ 1948年生まれ、小岩ワード部監督）



宣教師から受けた恩義に報いる責任

札幌伝道部専任宣教師 伊藤 ひとみ

緑 が波うち、木々も家も、風の運んでくる花々の香りさえ、祝福してくれているようです。ここ北海道の地が主から召された私の働く聖地であると心に感じ、喜びで一杯です。

バプテスマを受けた2年4カ月前、伝道に出

たい気持ちはありましたが、まさか自分が本当に伝道に出られるとは、とても考えられないことでした。特に家族には内緒でバプテスマを受けたぐらい教会に入ることを反対されていたので、その後も何かにつけ皮肉まじりの小言や非難の声を聞かされました。神様のことを悪

く言われるたび、くやしくて陰でいつも泣きながら、私は祈ることしかできませんでした。でも私は神様が本当に生きていらっしゃる、この福音が真実であり、イエスがキリストであることをよく知っています。

自分が少しでも良くなった、変わったと思われるように努力しました。家族のために働き、また手伝うことが喜びとなりました。そして去年のインスティテュートで「福音を分かち合う」のコースを受講し、教師のみたまにあふれたレッスンによって私の心の中には伝道に対する強い思いがわき上がり頭から離れなくなりました。

レッスンの中でブルース・R・マッコンキー長老の「私たちはひとり残らず、私たち自身にまた先祖に福音をもたらしてくれた宣教師に恩義を受けている。ほかのだれよりも宣教師に恩義を感じている人も多い……私たちにはその恩義に報いる責任がある。その最も良い方法は、私たちが宣教師となり全世界へ出て行くことである……」という言葉を読んだとき、私に福音を伝え、今でも手紙をくださる宣教師の愛に報いる方法を知りました。それが伝道に出る決心をするきっかけとなったのです。

また、つらいとき、苦しいときに私はよく祝福文を読みました。たくさんの祝福の最後に「……以上の祝福はみな、あなたの忠実さと謙遜、柔和であることにかかっていることを申し添え……」と書かれている所を読んで、はっきりと気づきました。「主に対し、私は謙遜でなかった」ということに。

謙遜とは、むずかしい事柄に対して「できません」と言うのではなく「できる限りの努力をしてみます」と言うことだと感じました。私自身、天のお父様に真剣に願い求めていなかったことに気づいたとき、私は本当に謙遜になれた

ような気がします。

その後、ちょうど支部長から「伝道に出る予定でしょうか？」と言われ面接を受けたとき、教義と聖約88章124節にある「怠惰なるを止めよ。不潔なるを止めよ。互いに欠点を探すを止めよ。度を過ぎて眠るを止めよ。早く臥床に入りて疲れを休めよ。朝は早く起きて汝の肉体と精神とを活気づけよ」とのチャレンジと励ましを受けました。私は今まで以上に固く「愛と信仰と希望を持てば、何でもできる。私は宣教師になれる」と信じました。心から従順になり、人々に奉仕したいと思いました。

人格形成プログラムの計画を立て、それに従って生活しました。冬の朝5時半に起きてジョギングし、朝食やお弁当を作ることも楽しみにしてきたある日、断食と祈りにより、父に伝道のことを話す決心をしました。両親を説得することは困難で、忍耐に忍耐を重ねるしかない状態でしたが、その日父に長い手紙を書きました。なぜ教会に入ったのか、どのようなことを学んでいるのか、また神様について、両親に対する感謝の気持ち、そしてなぜ伝道に出たいのか、を詳しく書き綴りました。

父は一晩中何回も読み、考えたそうです。そしてついに許してくれました。そして逆に、励ましてくれたのでした。奇跡です。口で言い表わせないくらいうれしくて、涙が止まらず、ひたすら天のお父様に感謝しました。

神様は、私たちが本当に戒めによく従い、信仰を持ってあきらめないで最後まで努力をするとき、神様を頼り祈るとき、確かに祝福を与えてくださることを心から証します。

伝道に出る決心をして準備をしていくうえで、今まで以上に両親の愛や優しさを強く感じました。父と母、そして家族が本当に私を愛してくれていること、私も心から両親を愛しているこ

とを感じ、さらに愛するようになりました。これは私にとって本当に祝福です。小さい頃から苦勞してきた両親の境遇や、何も言わないでよく働く後ろ姿に、子供である私は模範を見ていたことを知りました。

両親を心から尊敬し、愛しています。また陰ながらいつも励まし助けてくれた祖母に感謝しています。そして私を助けてくださった鹿児島支部の兄弟姉妹の皆さん一人一人に感謝してい

ます。

私は今、暑くなってきた札幌の地で、愛する同僚の宮本姉妹と伝道しています。ひとりでも多くの人に、幸福をもたらすこの真実の福音を愛とみたまによって宣べ伝えたいと思います。欠点や弱点の多い私ですが、使ってくださいる神様に、また神様のために働けることに、心から感謝しています。(いとう・ひとみ 福岡伝道部 鹿児島支部出身)



「私はお姉ちゃんが好きです」

札幌伝道部専任宣教師 磯村 美津子

現在、専任宣教師として伝道する機会があることを心から感謝しています。今から2年ほど前に伝道に出たいと思うようになり、月日がたつにつれてその気持ちはだんだん強くなっていきました。そしてステーキ部宣教師として働くうちに、この思いは決心に変わりました。そのときのことは、今も心に深く焼きついています。

ステーキ部宣教師としてなかなか改宗を見ることができないでいたとき、指導者から「それはあなたがたの信仰に問題があるからです」と言われました。心の中を釘で刺し貫かれたようで、その言葉を忘れることができませんでした。

しばらくして、今までに出たこともないほどの原因不明の高熱が出ました。40度近くの高熱が毎日続くので、会社も休み、寝たきりの日々を送りました。けれどもそのときは肉体の苦しみよりも霊の苦しみを感じたように思います。そして「今こそ、何かを得なければいけない」と強く感じ、一日中、声が天に届くほど祈ったイ

ノスほどではありませんが、真剣に一日中祈りと瞑想を続けました。

そのときでした。今まで感じたことのないほどの安らかな気持ちを感じたのは……。イエス・キリストの贖いの意味がわかったのです。確かに神様は生きておられ、イエス様が全人類のために犠牲を捧げてくださったことがわかったのです。私たちに対する神様の愛を感じ、温かなものに包まれている気持ちがして、涙がとまりませんでした。

そして「あなたの妹の昭子にこのことを話しなさい」という気持ちを強く感じたのです。前に話したときには受け入れてもらえなかったのですが、このときには、心の中に確信を持ちました。

そしてその晩、また熱が上がり、食欲もなく、ぐったりしていると妹が「お姉ちゃん、そんなことでは伝道に行けないよ」とポツリと言ったのです。妹がこんなことを言ってくれるなんて思いもしなかったので、うれしくなりました。と

同時に、「今だ」と感じました。そこで起き上がって、昼間言うべきだと感じたことについて話しました。私の心は熱くなり、ふと妹の顔を見ると目から涙があふれていました。

そして「イエス・キリストを信じています。バプテスマを受けたい」と言うのです。私は妹の純粹な信仰と奇跡を見ました。まさに教義と聖約50章22節の「教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり」とある聖句のようにお互いに悟り合って喜ぶ気持ちでした。そしてこのとき、妹の模範を通して自分に欠けていたものを見いだしたのです。

それから、気づくと私の熱は下がっていました。ちょうど熱が出てから1週間目でした。

妹と私は20年以上も一緒に暮らしていますが、このときほど妹に対する愛を感じたことはありませんでした。妹のためなら、なんでもしたいと思いました。

妹がバプテスマを受けるにあたって、大きな問題がありました。両親の強い反対を受けたのです。

一見、バプテスマを受けることが無理のように思いましたが、妹と私は、祈ったときにいつも平安と確信を得ることができました。「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」(マルコ11:24)とあるように、信じて祈るものはその通りになると信じていました。

そしてある日、父に話をしました。そのときのことを妹は、「自分で言おうと思っていたのとは違うことを言ってしまった」と言っています。私もこのとき、確かに聖霊の助けがあったと感じています。妹は「私はお姉ちゃんが好きです」とひとこと言っただけで、父は許可してくれたのです。

世界がバラ色に見えるくらいうれしいことで

した。そして私は、必ず伝道に出ることができるとも確信したのです。

両親の伝道に対しての反対は前にも増して強いものでした。しかしある晩心に「今だ」という気持ちを感じたとき、父母に話すと、父はひとこと、「行ってこい」と言い、「健康上のことで問題が起きたらお父さんが面倒を見る」と約束してくれたのです。あまりのうれしさに、父の言葉をすぐには信じられず、自分の耳を疑いました。

次第に両親に対する感謝の気持ちがあふれてきました。今まで育ててくれたこと、そして、愛してくれたことに感謝しています。私は善い父母から生まれたことをうれしく思っています。私の大切な父、母、妹たちを、心から愛しています。ですから永遠の家族となり、天のお父さまのみもとに帰りたいと望んでいます。このすばらしい福音を宣べ伝え、神さまのみ業を手伝う機会が与えられていることを心から感謝しています。(いそむら・みつこ 1962年生まれ、横浜ステーク部川崎ワード部出身)

手話通訳者として

—「神のみわざが彼の上に
現れるためである」—

札幌伝道部稚内支部

永島 美恵

「イ」 エスが道をとおっておられるとき、生れつきの盲人を見られた。弟子たちはイエスに尋ねて言った、『先生、この人が生れつき盲人なのは、だれが罪を犯したためですか。本人ですか、それともその両親ですか。』イエスは答えられた、『本人が罪を犯したのでもなく、

管内初 手話通訳の専門職を配置

———道身障者福祉協会宗谷支部

の証を強めることができました。

手話はすてきな言葉です。手話を通して新しい世界が開けてきます。手話を通して、耳の聞こえない人と友達になることができます。ろうあ者は皆、表現力や表情が豊かなので、それだけでも引かれる所が多くあります。またろうあ者たちは私の想像しがたい悲しみを経験していても忍耐強く、底抜けに明るいです。前向きに生きているろうあ者たちの姿から謙遜さや自分の高慢さ、神様から自分に与えられている祝福など、たくさんのお役を立てる喜びとそれに伴う責任の重さをひしひしと



手話人口をもっと広げたいと意欲をみせる永島さん

永島さん、大張り切り

「心と心が通う
関係作りたい」

【管内一】日付で、道身障者福祉協会から同協会宗谷支部（事務局・宗谷庁社会福祉課）に市内富岡二丁〇〇、永島美穂さん（以下、管内）が、管内では初め、手話通訳の専職として配置された。以前から市内などで、ろうあ者のボランティアを務めていた永島さんは、「手話通訳の仕事は高校時代からの夢。単なるソサニヤ（役以上の働きを）と、張り切っおり、関係者は今後の活躍に大きな期待を寄せている。

同協会の手話通訳者配置は、ろうあ者の積極的な社会参加を、四十九年から永島さん。また「手話」を出来る手話通訳者設置事業費補助事業に基づいてスタート。これまで市内の同協会各支所を中心に十一人が歴かれ、本年度、永島さんら

●北海道新聞 昭和59年4月 4日付

三人が宗谷、留萌、根室に配置された。愛知県出身の永島さんは、気象庁勤務の父親の転勤で四十九年に管内、管内商工三年の時、ろうあ者のテレビドラマがきっかけで手話に興味を持ち、五十二年、東北福祉大に進学した。学生時代、本格的に手話の勉強をし、五十五年管内に手話サークル発足と同時に、夏休みなどを利用して、同サークルの活動に参加、ろうあ者へのボランティアの手伝いもした。

管内には現在九十六人のろうあ者がいるが、「ただ講演会や会合などの手話通訳だけでなく、どんなことでも気軽にお手伝いを任せてもらえるような友だち関係を作ってきたい」と永島さん。また「手話」が出来ぬ人はまだまだ小人数、講習会などで手話人口を広げたい」と意欲を述べた。

また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである。」(ヨハネ9：1-3)

これは、私の心に強く残っている聖句です。子供の頃から「どうして世の中に不公平があるの?」「生まれたときから、体の不自由な人がいるのはなぜ?」という疑問を持っていた私にとって、この聖句はその疑問を解決するうえで大きな助けとなりました。そして具体的には手話というものを通して、また大学時代に知り得た神様の存在とともに福音が真実であることへ

感じています。普段私は、口先だけの表情の乏しい話し方をしがちなのですが、手話通訳を通してだんだん表現力がついてきました。手話を覚え、それによって耳の聞こえない人々と友達になることは、ろうあ者と話すための単なるひとつの方法として手話を覚えること以上に意義深く、大きな喜びをもたらしてくれるものです。

最初は人のためにとしたことでも、結局は自分の成長のためであり、自分に返ってくるのです。そこに神様のみ業と愛を知ることができると思います。

皆さんも、手話を覚えてみませんか？「覚える時間がない」「手話を覚えてもそれを使う機会がない」といった心配は無用です。手話を学ぶときに、神様が祝福を用意されて、手話を使う機会やさらにはそれによって伝道する機会をも与えてくださると思います。そこに神様の助けと導きがあることを心から証したいと思います。

現在、仕事として手話とかかわってけることに感謝しています。まだまだ未熟ですが、福

音を実践していく場として、この仕事を大切に続けていきたいと思えます。また、「本人が罪を犯したのでもなく、また、その両親が犯したのでもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」という意味を、そして全ての人が完全な体で復活することを、手話通訳の仕事を通して、伝えていきたいと望んでいます。(ながしま・みえ 1960年生まれ、セミナー教師)



神様は人を遣わされる

東京東ステークス部鎌ヶ谷支部

中村 信行

ルームメイトが授業を受けるために部屋を出たのを見計らい、カーテンを引いた寮の自室で、私は初めてひざまずいて神様に祈るという体験をしました。1975年春、1年間の予定で来ていたBYU（ブリガム・ヤング大学）でのことです。教会員でなかった私が最初に主に尋ねたのは、この教会が真実なものかどうかという疑問ではなく、なんと知り合ったひとりの教会員の日本人女性に結婚を申し込むべきか否かということでした。私には、答えが何らかの形で必ず与えられるという思いがありました。そして、当時在学していた山縣正史兄弟^{やまがた}の一言を、祈りの答えと確信して、彼女にプロポーズする決心をしたのです。

翌年、日本に戻って彼女と結婚すると間もなく、私は宣教師からレッスンを受け始めましたが、数々の疑問があり確かな証を得られず、また教会員としての生活は自由を束縛されるよう

に思えて、バプテスマを受ける決心ができませんでした。すべてを知り、すべてを納得できなければ受ける資格はないと思ったのです。そして、ついに何組目かの宣教師のときに、それ以上レッスンを続けることを拒みました。

妻について当時の東京第5ワード部に時たま集いながらも、私に神様のこと、イエス様のことを少しずつ学ばせたのは妻との語りでした。妻が自分の祈りの経験を通して証を得たように、私も神様との出会いを求めて何度か祈りました。しかし、心の中に燃えるような思いはなく、ひそかに期待した天使の訪れもありませんでした。妻は私が教会に入ることを望みながらも、もし彼女のためにと考えてなら入らないでほしいと言います。私はその言葉にもつけ込んで、真剣に考えることをやめ、教会にも出席しない日々が続きしました。

1982年、住みなれた下町、両国を離れて鎌ヶ

谷市に引っ越すと、その支部へ新しい気持ちで毎週集うようになりました。妻は、子供のためにこれから毎週必ず出席したいと言いますし、私も中途半端な気持ちでついて行くより、この際きっぱり教会と縁を切るか、教会に入るかの決定をしなければならないと思うようになりました。

その思いに応えるかのように、ある晩、高等評議員の平野勝也兄弟が私たちの家をわざわざ訪問してくださり、話し合う機会がありました。その晩の話の中で私の心に一番強く印象に残ったのは、「神様は人を遣わされる」という一言でした。

私は妻との結婚を決意したときのことを思い起こしました。祈るだけでは十分ではない。正しい答えを積極的に求め、捜さなければなりません。そして、それは多くの場合、ふさわしい人を通して与えられるものではないでしょうか。「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。たたけ、さらば開かれん」(文語訳マタイ7:7参照)という有名な聖句が私の心に浮かんできました。もう一度、ひやかしてなくレッスンを受けてみよう。私のいろいろな疑問に、さらには突っ込んだ質問に十分答えられる人が身近にいるだろうか。幸い、インスティテュートの教師である池内英二兄弟が同じ支部に居ることを知ると、妻に驚かれながらも、彼からレッスンを今一度受けることにしたのです。

私はそのレッスンを、本当に素直な気持ちで受けることができました。真理を求めました。みたまの力は私に、語られていることが真実であることを教えてくれました。レッスン半ばにして私は、よい実を結ぶよい木から離れることはできないことを知りました。すると、いままで捨てがたいものがありながらそっぽを向こうとしていて、ついにそうはできなかった迷いの重荷から解放されて、心が軽くなりました。バプテスマを受ける決心をして、うれしいと思うようになるとは自分でも驚きました。

1982年8月1日のバプテスマ会は、私が特にお願いして早朝にしてもらったにもかかわらず、多くの兄弟姉妹が出席してくださいました。当日、横浜から駆けつけてくださった山縣正史兄弟は、私を紹介するための話の冒頭、お祝いの言葉の代わりに「きょう中村兄弟のバプテスマに臨んで、胸が一杯です」と述べただけで多くは語らず、証をして終わりました。私は、この言葉に感動しました。BYUで一緒だったときからずっと私と妻のことを見守り、常に社会人として、また教会員としての模範であった彼の愛を強く感じたのです。

同じようにして、私たちのことをいつも心にかけて、機会あるごとに助け、導いてくださった細谷佐兄弟、神成弘昭兄弟、そして小岩ワード部や鎌ヶ谷支部の兄弟姉妹に感謝いたします。さらに辛抱強く待っていてくれた妻に、そして何にも増して、私の祈りに答え、一番必要なときに人を遣わしてくださいました神様に感謝いたします。

私は、この教会が真実の教会であること、神様は確かに生きていらっしゃる、いつでも、すべての人を見守り、導いてくださることを証いたします。(なかむら・のぶゆき 1950年生まれ、鎌ヶ谷支部長老定員会会長)

熊本北支部教会堂の 建設に寄せて



熊本地方部
熊本北支部

一の宮 清

「神様は不思議なことをなさいます」という言葉を過去何回か聞いたことがありますが、本当に不思議でなりません。それは、

この熊本北支部の教会堂の敷地にまつわることで

私は昭和23年に熊本市から25キロ離れた田舎に住んでおりましたが、教会に入りたくてある教会を訪問しました。玄關から何度も声をかけましたが、ついにだれも出て来られませんでしたので私はあきらめて帰り、ずっとそのままになっていました。

その後私は仕事の関係で熊本市に移り住むようになり、20年の歳月が流れました。昭和43年2月10日午後7時15分頃、ふたりの若いアメリカ人の訪問を受けました。その人たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師でした。

当時私は一日に100本のタバコを吸うヘビースモーカーでした。ニコチン中毒のためタバコをやめなければ仕事に支障をきたすおそれがあるほどで、廃人の一歩手前だったのです。自分自身、タバコをやめなければならぬ、と真剣に思いつめていた頃でした。そのようなときに天父は私を救ってくださるためにふたりの宣教師を遣わしてくださったのです。彼らの訪問がなかったなら、私は生けるしかばねとなっていたらろうことは明白です。

その後私は、バプテスマの意義づけをしっかりとする必要があると思い、バプテスマと誕生日を一致させ、新たに生まれ変わろうと心から思いました。そして7月28日の誕生日に、郷里の川でバプテスマを受け、この教会の会員になることができました。

熊本に伝道が開始されたのが昭和41年11月10日、北部極東伝道部の時代です。その後この北支部の教会堂が完成するまで、市内の家賃の安い広い空家を捜し、6カ所も転々と移り変わりました。

昭和46年福岡ステーキ部時代に、早く教会堂の敷地を見つけるようにチャレンジを受け、支

部長をはじめ神権指導者は懸命に敷地捜しをしましたが、いずれも教会本部の検分の結果はだめでした。いろいろな事情から早急に見つける必要があり、タイムリミットが近づいて気が気ではありませんでした。

私はもうあきらめようかと思いました。しかし主から「お前は真剣に敷地を捜したのか」とお尋ねを受けたときに、「はい、主よ、私は一生懸命に努力し捜しました」と言えるだろうかと自問するときに、答えは否でした。よし、きょう一日、最後だと思って頑張ってみようと思ひ、近くの不動態業者の所へ行きました。希望条件をお話したところ、ひとつの物件が紹介され、さっそく現地に行ってみましたが、奇しくもそこは私が昭和23年に訪れた教会の跡地だったのです。

所有者の方は、自分の土地が世の中のためになるのであれば、とご自分が買った値段で、しかも実面積は帳簿面積よりも広いにもかかわらず帳簿面積で取り引きをさせていただきました。

神様は私を長い年月にわたって愛と忍耐を持って見守っておられたのです。36年前最初に訪れた教会に入っていたら、私はこの末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になることはできなかったし、この教会堂の敷地もあるいは見つからなかったかもしれません。

ここには、私の見ることのできない神様の力が働いています。確かに神様は生きてましまし、私たち一人一人を愛し、導いていてくださることを実感として証します。これからも余生を教会のため、主のみ業の発展のために捧げたいと思っています。この教会は、地上における唯一真の神様の教会であることを心から証します。

(いちのみや・きよし 1922年生まれ、熊本地方部第一副地方部長)

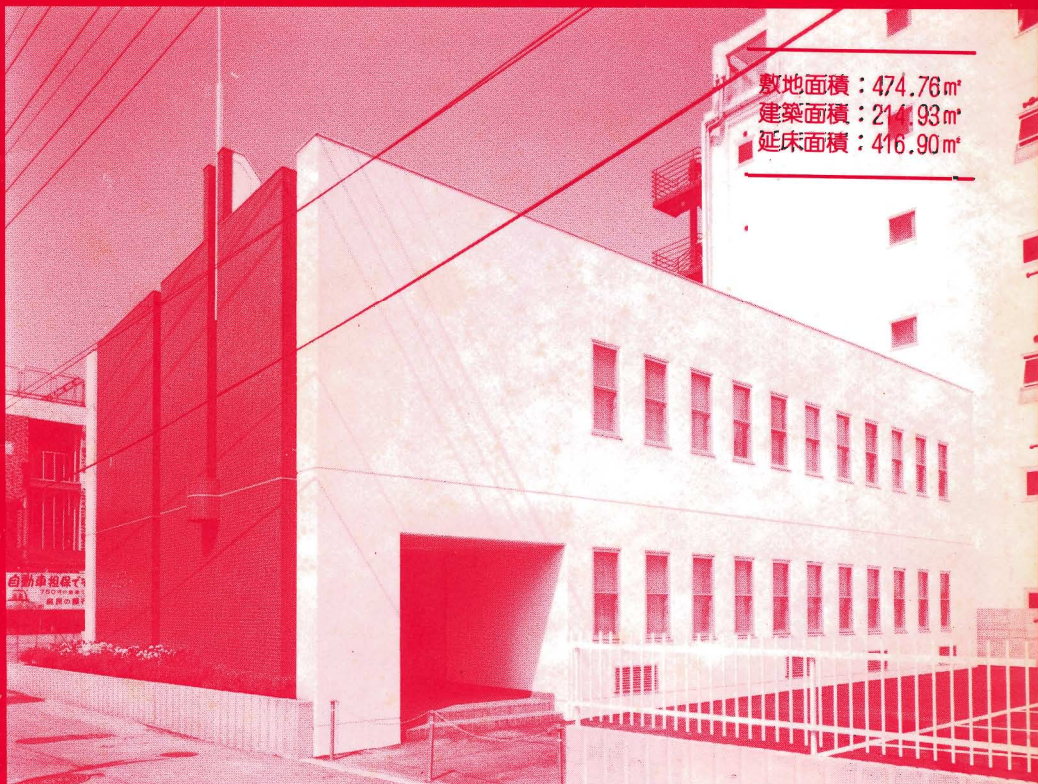
熊本地方部熊本北支部教会堂 1984年4月26日完成

熊本県熊本市南坪井町10-3 TEL 096-325-9279

敷地面積：474.76㎡

建築面積：214.93㎡

延床面積：416.90㎡



小笹康正支部長



